

岡山県立大学

研究・社会貢献シリーズ
(デザイン学部)

目 次

タイトル	著者	頁
写真を活用するアートプロジェクトに関する研究	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 北山 由紀雄	1
組織等を対象としたシンボルマーク・ロゴタイプ のデザイン及びアプリケーション開発	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 野宮 謙吾	3
近現代俳句の研究と創作	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 柴田 奈美	5
絵画・版画を主体とするビジュアル表現の研究	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 関崎 哲	7
情報提供や情報理解における映像およびデジタルツールの効果	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 齋藤 美絵子	9
学習教材におけるマンガ・イラストの活用法の研究	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 中西 俊介	11
総社市議選における投票率向上を目的とした選挙啓発 動画の制作	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 山下 万吉	13
C L I L (内容言語統合型学習) を導入した英語教育	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 風早 由佳	15
移住促進にむけたPR手法の研究	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 高橋 俊臣	17
グラフィックデザインにおけるユーモア表現の研究	デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 西田 麻希子	19

タイトル	著者	頁
ユニバーサル・ミュージアムにおけるテキスタイル表現の可能性	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 島田 清徳	21
ものづくりを活用した工芸系デザイン教育と県内文化施設の連携プログラム	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 島田 清徳、難波 久美子、渡邊 操、真世土 マウ、作元 朋子、今田 千裕	23
現代アートの作品解釈における分析美学的研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 河合 大介	25
独自製品の開発を目指す県内企業との多面的共同研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 村木 克爾、情報工学部 情報システム工学科 市川 正美	27
間伐材の需要を促すため、素材を活かした造形デザインの研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 南川 茂樹	29
ケア用品のデザイン評価と製品開発への応用	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 三原 鉄平	31
アクティブシニアのコンテンツ制作を支援するプロトタイプツールキット研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 石 玉美	33
セラミックデザイン・古代中南米土器	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 真世土 マウ	35
新領域へのデザイン提案・素材開発から製品化と商品展開	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 船山 俊克	37
綿を使用した自動織機・手織機によるテキスタイル研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 渡邊 操	39
積層で作る陶磁器造形とセラミックデザインの研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 作元 朋子	41
英語による拡張現実インターネットサイトの設計に関する研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 ブルネリ・アンソニー	43
情報デザイン：情報提示の手法とそのインタフェースの研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 尾崎 洋	45
デザイン検証モデル制作工法の研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 中原 嘉之	47
蠟染め技法を用いた染色表現の研究	デザイン学部 工芸工業デザイン学科 今田 千裕	49

タイトル	著者	頁
形態可変構造の設計手法に関する研究	デザイン学部 建築学科 津田 勢太	51
歴史的価値のある建築の活用計画	デザイン学部 建築学科 福濱 嘉宏	53
閑谷学校の歴史的・文化的価値に関する研究	デザイン学部 建築学科 向山 徹	55
1. 場を活かした建築空間の理論及び実践研究 2. ドイツ近代建築の造形システムに関する研究	デザイン学部 建築学科 吉田 豊	57
戸建て住宅のデザインの研究—総社市に建つモデル住宅「繫」—	デザイン学部 建築学科 西川 博美	59
災害時の木造応急仮設住宅建設に関する研究	デザイン学部 建築学科 畠 和宏	61
エリアリノベーション時代の生活景に関する研究	デザイン学部 建築学科 穂苺 耕介	63
西洋建築史と建築デザインをつなぐ：リノベーションと歴史	デザイン学部 建築学科 岡北 一孝	65
道路交通ノイズマップ推計における計算プログラムの開発	デザイン学部 建築学科 原田 和典	67

写真を活用するアートプロジェクトに関する研究

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 北山 由紀雄

1 研究内容

アートやポップカルチャーを活用し、流入人口（観光）を増やす試みは、様々な場で行われ、軽視することの出来ない経済的・文化的効果を上げています。私の研究は、その中であって、写真という旧態依然としたメディアを軸に、対象とした地域における流入人口の増加、更にはそれに携わる関係人口の増加に活用することで、本来あるべき写真の文化的価値の認識・向上を目指す研究を行っています。

専門とする写真は、古くから様々な場面で活用され続け、今日のデジタル化に伴い、その範囲と効果はSNS等を含め、更に拡大しています。その一方で、日本における写真文化の有り様は、コンテストに応募して権威ある賞を目指すといった形態から脱却できておらず、参加者の高齢化も進み、衰退の一途をたどっています。

一方で、写真を撮るという行為は、携帯電話にデジタルカメラが搭載されて以降、より身近なものとなり、そこに搭載されるカメラの性能も上がり、これまでは考えられなかったことが容易に出来る状況となっています。この今日の変化を踏まえ、誰もが参加可能な写真コンテストと、誰もが楽しむことが出来る、写真展を企画・実行し、地方におけるその効果について実証実験を行っています。



2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・フォトコンテストなどの企画立案に関する事
- ・写真展示の方法や展示デザインに関する事
- ・デジタル技術を駆使した写真制作に関する研究

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

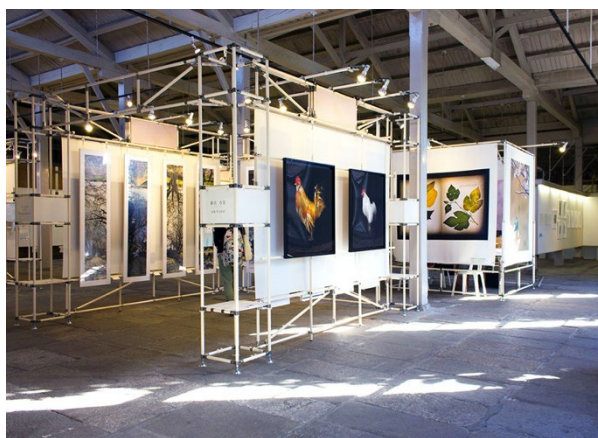
- ・2004年より、倉敷商工会議所、倉敷市文化振興財団と共に、倉敷フォトミューラルを実施しています。倉敷フォトミューラルは、倉敷駅前アーケードに大型布プリントを展示する企画で、作品を全国公募し、作品の審査を著名な写真評論家に依頼するなど、本格的な写真コンテストとなっています。併せて、関連事業としてワークショップの実施、作品講評会なども行っています。

- ・地方自治体の依頼で、写真コンテストを企画すると共に、作品の展示デザインを実施。低予算で作品展示に必要な展示器具のデザインを行いました。
- ・高精細でのパノラマ撮影と合成を行い、イベントでの展示を行っています。



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・地域振興を意図したアートイベントの企画提案や、実施方法に関するアドバイス
- ・低予算で実現可能な展示デザインの提案
- ・郷土歴史史料（写真）の保存措置や、その活用に関するアドバイス



5 連絡先

研究室：0866-94-2068
 メール：ktym@dgn.oka-pu.ac.jp

組織等を対象としたシンボルマーク・ロゴタイプのデザイン及びアプリケーション開発

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 野宮 謙吾

1 研究内容

組織イメージをアピールするには、VI（ビジュアル・アイデンティティ：組織ブランドを象徴するデザイン要素一式のこと）の戦略的活用が必要です。

VIの主なものには、シンボルマーク・ロゴタイプがありますが、そこには組織の理念・スローガン・ビジョンの表現はもとより、審美性・独創性が求められます。

本研究では、組織等を対象としたシンボルマーク・ロゴタイプのデザイン、及びイメージづくりに活用するためのアプリケーション（ステーションナリ、グッズ、サイン等）開発の手法について、制作活動を通して実験・検証しています。



2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 企業、NPO、自治体等、組織におけるシンボルマーク・ロゴタイプのデザイン及びアプリケーション（ステーションナリ、グッズ、サイン等）開発
- ・ 製品、広報物のためのシンボルマーク・ロゴタイプのデザイン
- ・ シンボルマーク、ロゴタイプデザイン関連の審査、アドバイザー活動

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・健康おかやま 21 栄養成分表示の店、禁煙・分煙実施施設 表示マーク (2003 年度、岡山県保健福祉部)
- ・NPO 法人吉備スポーツ王国のシンボルマーク・ロゴタイプ (2005 年度、NPO 法人吉備スポーツ王国)
- ・後楽園の梅製品お庭そだちのロゴタイプ (2005 年度、岡山後楽園)
- ・真庭ひかりネットワークシンボルマーク、ロゴタイプ (2006 年度、真庭市)
- ・第 26 回全国都市緑化おかやまフェアのロゴタイプ (2007 年度、岡山県土木部都市局都市計画課)
- ・岡山国文祭ロゴタイプ (2008 年度、岡山県生活環境部文化振興課国民文化祭準備室)
- ・「真庭いきいきテレビ (略称: MIT)」のシンボルマーク・ロゴタイプ (2009 年度、久世エスパス振興財団)
- ・赤ちゃんの駅シンボルマーク (2009 年度～、笠岡市、岡山市、倉敷市、浅口市、早島町、赤磐市、総社市、高梁市、井原市)
- ・「ぱっちり! もぐもぐ」生活リズム向上キャンペーンのマスコットキャラクター・アートディレクション (2011 年度、岡山県教育庁)
- ・「総社」ウォーキングのすすめ マップデザイン (2013 年度、総社市)
- ・備中高梁フィールドミュージアム事業のロゴ、シンボルマーク (2013 年度、NPO フォレストフォーピープル岡山)
- ・聴覚障害者成人を対象とした絵カードのデザイン (2013 年度、社会福祉法人旭川荘)
- ・ハローズ×岡山県立大学共同研究のシンボルマーク (2014 年度、株式会社ハローズ)
- ・株式会社さのオートセンターのシンボルマーク、ロゴタイプ、サイン (2014 年度、株式会社さのオートセンター)
- ・「三浦印刷所」ロゴマーク (2014 年度、株式会社三浦印刷所)
- ・総社市見守り支援協カステッカー・アートディレクション (2016 年度、総社市)
- ・池田動物園すけっとプロジェクト・アートディレクション (2018 年度、池田動物園)
- ・勝央町『勝ブランド』のシンボルマーク・ロゴタイプ、VI デザイン (2018 年度、しょうおう志援協会)
- ・勝ブランドの商品開発及びパッケージデザイン (2019 年度、しょうおう志援協会)
- ・笠岡市立図書館におけるピクトグラムを用いた館内サインデザイン (2019 年度、笠岡市立図書館)

4 今後の研究成果の展開 (社会貢献等の可能性)

- ・グラフィックデザイン領域における文字デザインの専門分野「タイポグラフィ」の視座よる、審美性・独創性に優れた「新しい」シンボルマーク・ロゴタイプ等のデザイン提案
- ・シンボルマーク、ロゴタイプデザイン関連の審査、アドバイザー活動

5 連絡先

岡山県立大学デザイン学部 野宮研究室
TEL/FAX : 0866-94-2071/0866-94-2071
Mail : nomi@dgn.oka-pu.ac.jp

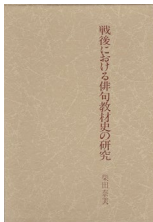
近現代俳句の研究と創作

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 柴田 奈美

1 研究内容

正岡子規を中心とした近・現代俳人、俳句の研究を行っている（受託研究「赤木格堂の研究」2000年度両備檉園記念財団、2001年山陽放送学術文化財団）。教材としての俳句という視点で『戦後における俳句教材史の研究』を1989年に上梓。俳句表現を文法的な視点から分析・鑑賞し、『俳句表現の研究』を1994年に上梓。子規・漱石・虚子の文芸的交流という視点、俳句分類を基礎とした子規の俳句革新のあり方という視点から研究を進め、『子規・漱石・虚子—その文芸的交流の研究—』『正岡子規と俳句分類』を1995年、2001年に上梓した。2007年度からデザイン学部にも所属が変わったことを契機とし、美術の領域に大きく関わる子規の写生論の研究に本格的に取り組んでいる。

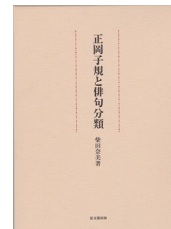
また、研究とともに俳句の実作も手掛けている。1981年より山口誓子に師事し、句作を開始。1997年に俳句雑誌「天狼」に発表した句を纏めて『天啓』を上梓。1997年以降は、正岡子規が目指した絵画的な俳句、また困難とした人事句を課題として取り組んだ。さらに「銀化」主宰の中原道夫に師事し、2007年に第2句集『黒き帆』を上梓した。現在は写生に重心を戻しつつ、滋味ある奥深い作風を目指し、第3句集の出版に向けて準備している。



戦後の教科書に掲載された俳句の採用のされ方について研究した。



子規と漱石と虚子の俳論を研究し、彼らの文芸的交流を明らかにした。



子規が分類した古句十万句の正岡子規の俳句約二万句への影響と、子規の俳句の新しさを指摘した。



第1句集『天啓』

代表句

山吹の垂るる断崖死の高さ



第2句集『黒き帆』

代表句

蝸やしづかにその人を赦す



共同執筆者として、歳時記の季語の解説なども行っている。

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・近現代俳句・俳人に関する講演
- ・俳句の選者・句会の指導
- ・学校現場での俳句鑑賞法や句作方法の指導

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・岡山県文学選奨「俳句」部門選者、文芸くらしき俳句部門選者、朝日新聞「岡山俳壇」選者、邑久光明園「楓」俳壇選者、美咲町「さくらのうた」俳句部門選者、ジュニア「夢」俳句大会選者、ユーキャン俳句講座添削・選者など
- ・吉備創生カレッジ講師・「高校生文芸道場おかやま」俳句分科会講師など
- ・書評、歳時記や俳句事典等の執筆、俳句総合誌への寄稿など
- ・日本現代詩歌文学館評議員、子規研究の会理事、公益社団法人俳人協会幹事、岡山県俳人協会副会長、日本語検定試験問題審査委員
- ・岡山芸術文化賞選考委員、岡山県文化振興審議会委員



選考結果講評風景



選評風景

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・書評や俳句総合誌への寄稿や講演を通して、研究成果を社会に還元したい。
- ・研究と創作体験をもとに、学校教育の現場で俳句の授業を行いたい。
- ・研究と創作体験をもとに、各種の俳句選者の活動を継続したい。

5 連絡先

岡山県立大学デザイン学部 Tel: 0866-94-2064 Fax: 0866-94-2201
Email: shibata@dgn.oka-pu.ac.jp

絵画・版画を主体とするビジュアル表現の研究

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 関崎 哲

1 研究内容

日頃から、絵画・版画を主体とするビジュアル表現について、実制作を通して考えている。造形表現は実に多様で、そこから得られる経験は、デザインの分野や造形教育の分野に生かすことのできるものが多い。様々な情報がデータ化され、“もの”としての実態がないまま処理され消費される現状を見るにつけて、“もの”を用い“もの”に働きかけるという行為の重要性を再確認するとともに、そのことを具体的な行為・作品としてどう伝えていくかが、現在の研究テーマである。



2019/1/22-27 岡山二紀展での自作品展示 天神山文化プラザ

実際の作品制作の過程では、素材が持つテクスチャーを表現要素として扱う。そして、最終的にそれらのテクスチャーが、絵の具（絵画の場合）や限定された版材（版画の場合）によって置き換えられた“もの”となっていることを目指して制作を進める。

置き換えられた“もの”としての作品化の際に、用いる技法が、感光性樹脂版を用いた凸凹版と、水無しリトグラフ（平版）である。新しい版表現技法であるが、比較的製作工程が簡単であるため、子どもから大人までビジュアル表現を楽しむための教材として利用できないか、その可能性を探っているところである。



感光性樹脂版と作品



水無しリトグラフ版と作品

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 絵画・版画を主体とするビジュアル表現の研究
- ・ 造形教育、造形表現に関わる教材及び指導方法の研究
- ・ 造形表現をベースにしたワークショップの計画立案、実践

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・ ワークショップ実践：こんにちは美術館 岡山県立美術館
美術鑑賞を伴った造形ワークショップ
- ・ ワークショップ実践：紙版画で元気を刷ろう 老人福祉施設うららか
デイサービスに来られた方との版画ワークショップ
- ・ 展示企画立案実施：「版表現のたのしみ展IV」 吉備路文化館
主催：関崎研究室＋総社市教育委員会
後援：倉敷市教育委員会
- ・ 講座講師：倉敷市立美術館版画講座（銅版・平版） 倉敷市立美術館
- ・ 版画指導：県大はながこうぼう in チュッピーひろば
主催：県立大学保健福祉学部・デザイン学部
協力：NPO 法人きよね夢てらす子育て応援こっこ
- ・ 版画指導：日ようび子ども大学 版画で遊ぼう 岡山県生涯学習センター
主催：大学コンソーシアム岡山
日ようび子ども大学実行委員会
岡山県生涯学習センターキッズフェスティバル実行委員会



県大はながこうぼう in チュッピーひろば



日ようび子ども大学 版画で遊ぼう

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・ “もの”を用い“もの”に働きかけることで生み出される造形表現の重要性和楽しさを体験してもらえるようなワークショップを計画・実践し、感性を育てる造形表現の普及に努めたいと考えている。

5 連絡先

デザイン学部ビジュアルデザイン学科関崎研究室
：sekizaki@dgn.oka-pu.ac.jp

情報提供や情報理解における映像およびデジタルツールの効果

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 齋藤 美絵子

1 研究内容

情報を提供したいときや周知したいとき、また、情報を得たいときや理解したいときに、その情報量がさほど多くなければあまり問題は生じないかもしれないが、情報量が膨大なときには、提供方法や表現手法等によって効果が異なると考えられる。さらに、その情報を理解することが難しく、対象者にとって興味が無い分野であるなど、情報量だけでなく難易度や関心度も周知や理解に影響する。

そのような中、ウェブサイトや映像コンテンツといったデジタルツールの特性に注目し、表示情報量の加減をユーザが操作することができるインタラクティブ機能や、より深掘りして知りたい詳細情報は前提となる情報の後にしか表示できないようにする段階表示機能、計算機によって絞り込まれた情報が表示される探索機能などの効果を明らかにし（図1・2）、現在は、災害避難計画や災害準備など、防災・減災に関する情報提供ツールに展開している。

今日の社会に求められるデジタルツールの特性や有効性について調査・分析を行い、デジタルツールの制作および活用に関する研究に取り組んでいる。



図1・2 被験者実験による機能の効果検証

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 水害リスクコミュニケーションのためのデジタルツールの効果
- ・ ICT を活用した情報提供の研究
- ・ 映像コンテンツと視聴環境の関係に関する研究

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・防災情報総合サイト『家族だそうじゃ！みんなで減災、みんなのために』
総社市危機管理室との共同研究にて制作し、現在も総社市ウェブサーバにて一般公開している。(図3)

<http://sojabousai.city.soja.okayama.jp/kazoku/>

- ・『総社市 洪水・土砂災害ハザードマップ デジタル版』
総社市危機管理室との共同研究にて制作し、現在も総社市ウェブサーバにて一般公開している。(図4)

<http://sojabousai.city.soja.okayama.jp/kouzui/>

- ・2019年3月より、倉敷市真備町川辺地区にて高齢者を主な対象とした「初心者向けスマホ講座」を月1回程度開催し、防災アプリやデジタルツールの利用促進に取り組んでいる。



図3 防災情報総合サイト

4 最寄りの避難場所詳細と距離、経路表示

(3) で表示された避難所マークをクリックすると、人型マークからクリックされた避難所までの経路が自動計算され地図上に表示されます。また、避難場所までの距離が詳細画面の「距離」に表示されます。経路の自動計算は、できるだけ短い経路を優先的に選ぶようにプログラムされています。ご自身の経験や知識も加え判断してください。



図4 デジタルハザードマップ

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・防災意識向上のためのツール（ウェブサイト、アプリなど）のデザイン
- ・避難計画のためのツール（ハザードマップなど）のデザイン

5 連絡先 e-mail: cytoo@dgn.oka-pu.ac.jp

学習教材におけるマンガ・イラストの活用法の研究

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 中西 俊介

1 研究内容

マンガは現代における基幹メディアの一つとなっており、マンガを原作としたアニメーションや映画、ゲーム、ネットコンテンツなど、さまざまなジャンルに展開利用され、メディアミックスの典型的な事例となっている。近年ではマンガ自体の総売上は下落傾向にあるが、そこから派生した他ジャンルへの活用、また諸外国での受容状況等を考慮すると、現在でもその影響力は増大を続けているといえる。そのような社会状況の中で、幼年期からマンガに慣れ親しんだ若年層に深く受け入れられる一方で、活字離れが深刻さを増している。

いま日本の学校施設では、活字離れに起因する学習力の低下が顕著である。問題の意味や意図を正確に理解することができないため、そこから論理的思考を伴った回答をできない生徒が増加しているのである。このため、一部の教育系出版社が、教科入門用副教材としてマンガを利用し始めている。内容の導入部分にマンガを利用することで、生徒の興味を喚起し、内容の概略や問題点を理解させ、結論の文章を読ませることを目指している。しかし、理系科目での導入事例は少なく、改善の余地は残されている。

現在でもマンガは社会的に「子供の読むもの」と認知され、まだまだ教育の世界での受容度は低い。しかし、マンガは脳にイメージとして直接働きかける特徴があるため、理解が容易で記憶の定着度が高い等、優れた面も多く持つ。またデメリットとして、文章と比較してページ数が多くなる傾向が強いが、電子メディアを活用することで今後、解決できる可能性が高い。しかし、マンガは内容の構成や執筆後修正の難化等、編集作業が現在よりも高度化するにも関わらず、教育系マンガ活用手法の特徴を明確化し、それらを体系的に捉える研究は殆ど為されていない。このため、最適化された編集の特徴やそれらの効果的な使い分けを、既存の教育系出版社が理解することは困難であり、これが教育の現場でマンガが普及しない要因となっている。つまり、本研究領域においては、教育系マンガ活用手法の構築と同時に、教育系出版社に既存の文章主体の教科書との関係性や明確な使用方法を示すことが肝要になると考えられる。

以上のことから、本研究では以下の3点についての研究を、既存調査と現物制作の両面から研究を実施している。

1. 副教材用教育マンガのためのレイアウト構造および色彩配置計画の構築
 - 1-1. 各教科における特徴の分析
 - 1-2. 各教科におけるレイアウトおよびページ構成方法の構築
 - 1-3. 欧米のコミックスを参照した色彩配置計画の研究
2. 副教材用教育系マンガの執筆および評価分析
 - 2-1. 副教材用教育系マンガの執筆
 - 2-2. DTPによる冊子試作およびレイアウト構成の修正
 - 2-3. 印刷物制作
3. 副教材用教育系マンガの電子書籍化と映像表現への展開
 - 3-1. 教育における電子書籍ツールの調査および利用方法の考察
 - 3-2. 電子書籍および映像（アニメーション）表現への展開による実験制作
 - 3-3. 電子書籍および映像試作のネット配信による効果検証

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・マンガ・イラストを活用したPR活動
- ・絵本、グッズ製作
- ・グラフィックデザイン、ウェブデザインの制作

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・教育系出版社 / 補助教材の監修
- ・総社市上下水道課 / 水道啓発用パンフレットの作成
- ・総社市商工観光課 / SOJA イルミネーションの参加
- ・備前県民局 / 交通安全啓発グッズの作成
- ・美作県民局 / 美作国建国1200年記念シンボルマーク
- ・(株)エブリイホームイホールディングス/集客のための催事やDPの研究
- ・矢掛町 / 商品パッケージのデザイン



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・新規産業の広報サポート
- ・商品開発のデザイン提案

5 連絡先

s-nakanishi@dgn.oka-pu.ac.jp

総社市議選における投票率向上を目的とした選挙啓発動画の制作

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 山下 万吉

1 研究内容

近年、日本で行われた選挙の投票率は国政選挙や地方選挙を問わず年々低下している。そこで、令和3年9月19日に実施した総社市議選において、特に低下が著しい若者世代から四十歳代の年齢層をターゲットとして、投票率古城を目的とした選挙啓発動画の制作と発信方法の研究を行った。

共同研究者及び分担：

岡山県立大学ビジュアルデザイン学科・准教授 山下万吉（企画提案、監修、評価）

総社市 選挙管理委員会・事務局・局長 河原隆氏（情報提供、検証、評価）

岡山県立大学デザイン学研究科造形デザイン学専攻 平井聖也（映像制作）

<動画の内容>

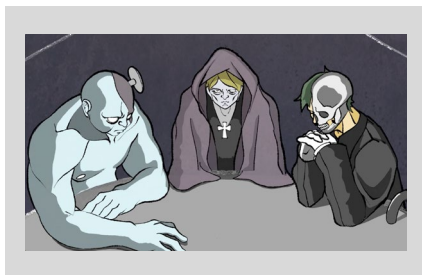
30秒のアニメーション。制作期間は令和3年5月から9月上旬。

正義のヒーローが悪の組織“極悪団”から平和を守る世界。何をやってもヒーローに邪魔をされる極悪団は、ヒーローが選挙に行っていない情報を掴み、世界征服の最終手段として選挙（投票）に行くことを選ぶというストーリー。

キャッチコピーは「投票には未来を動かす力がある」。自分たちが投票に行かなくても、誰かが投票に行き、未来は動く…。 “良くも、悪くも”です。選挙や投票がいろんな意味をもち、複雑な社会状況になるなか、（ヒーローのような）誰かが行くから投票に行く、のではなく、自分自身で考えて、自らの意思で投票に行っていきたいという意味を込めた。

動画視聴→総社市公式YouTubeチャンネル

<<https://www.youtube.com/watch?v=ygwe0Ge1tTs>>



<公開方法>

立候補者告示前の2021年9月10日より、以下のWebサイト等にて公開。

- ・総社市公式YouTubeチャンネル
- ・総社市ホームページ
- ・総社市役所公式LINE

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・映像を活用したプロモーション、啓発
- ・TV等の番組及び映像制作（取材・企画・演出）

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・「市民参加型 映像制作による地域の絆と愛着づくりプロジェクト」／2012／総社市（そうじゃフィルムコミッション）：制作スタッフ・キャストをオール総社市民、オール総社ロケの映画制作。
- ・国際交流基金 eラーニング総合プロジェクト・漢字アニメーションの試作品制作／2014～2015／独立行政法人 国際交流基金 関西国際センター／日本語を学習する外国人を対象とした「漢字への興味付けを目的とした漢字のモーショントイポグラフィ」を造形デザイン研究科院生と共に制作。
- ・「生中継コーナーの制作（演出）及び 生放送における岡山の地域 PR 効果」／2015～2019／NHK プラネット中国支社・NHK／NHK 総合「あさイチ」における生中継コーナーの演出・制作による他県に向けた映像による岡山県 PR。
- ・総社市放送番組審議会／委員（2019）、会長（2020～）

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・制作した動画と投票率の検証。
- ・その他、動画を活用した啓発、プロモーション等の企画提案及び制作。

5 連絡先

tel :0866-94-2075

fax :0866-94-2201 E-mail:mankichi@dgn.oka-pu.ac.jp

CLIL（内容言語統合型学習）を導入した英語教育

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 風早 由佳

1 研究内容

平成 23 年に小学校「外国語活動」が導入され、各地で様々な取り組みがなされてきた。さらに平成 31 年からは、小学校第 5, 6 学年において「英語」と「プログラミング」が必修化された。こうした背景から、以下の点について研究を行っている。

①幼稚園～小学校での英語教育のカリキュラム・評価指標・教材開発

総社市英語特区幼稚園と共同でテーマ別英語評価シートを作成した。定期的な口頭テストを実施し、約 2 年の実践データを元に評価指標を設定した。

また、英語指導に当たる教員の支援教材として、「Classroom English」(e-learning 連動)を作成し、総社市全小学校、幼稚園、岡山県内の学校、園に配布した。[例：英語特区幼稚園共同開発評価シート一部]

テーマ別評価シート														
目的:	記号者:													
名前:														
テーマ:														
skills	1	input	2	input/output	3	output	4	5	その他					
言語理解 (理解の深さや、プロセス・アウトプット)	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。	英語による伝えたい内容の意図、目的や主題を、簡潔な表現がわかる。意味、内容を理解することができる。					
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	その他	
attitude	1	2	3	4	5	その他								
評価	1	2	3	4	5	その他								
言語の習得 (ことばの知識・技能の習得)	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。	英語の音や声、意味の読み分けがわかる。楽しみながら聞くことができる。
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	その他	
英語特性 の気づき	1	2	3	4	5	その他								
英語特性の気づき	1	2	3	4	5	その他								
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	その他	

②CLIL (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習)を応用した英語学習

プログラミング教育と英語教育、理科教育と英語教育を組み合わせた指導のためのカリキュラム開発、評価指標及び教材開発、指導者支援プログラム開発に取り組む。

英語特区との連携による英語活動イベント「英語でサイエンス@県大」では、基礎的な理科の教科内容について英語を使って学ぶ講座を実施。「Kid's English@県大」では身近なテーマについて TPR などを用いながら英語を学ぶ活動を実施、分析。



[Classroom English 冊子一部抜粋]



[CLIL を導入した英語活動イベントの様子]

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・小学校英語教育、早期英語教育におけるカリキュラム・教材開発
- ・小学校英語における CLIL 教育
- ・教員養成課程における英語指導力育成カリキュラム
- ・英米児童文学、アメリカ文学・文化について

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

【講演】

- ・岡山県立図書館とことん活用講座 講師（題目：「マザー・グースの世界へー英米児童詩を楽しむために」）
- ・倉敷市立中央図書館 国際交流講座 講師（題目：「マザー・グースの界へー英国の暮らしの中のわらべうた」）
- ・岡山県生涯学習大学 講師「心豊かにいきいきと生きる」（現代的課題を学ぶコース）（題目：「マザー・グースが語る人生の楽しみ方」）
- ・総社市教育委員会指定 幼稚園教育研究発表会 講演会 講師（「心豊かな子どもを育てる幼児期の英語教育」）
- ・文教協会「地域への出前科学教室による科学リテラシー向上に関する実践研究」「詩と科学のつながり」講師



[講演会の様子]

【自治体との連携（講師・指導助言）】

- ・文部科学省英語特区事業（総社市山田・維新）「英語公開授業」指導・助言
- ・文部科学省英語特区事業（総社市山田・維新）「英語評価表作成」指導・助言
- ・外部専門機関と連携した英語指導力向上授業 玉島小学校「英語科」研究発表会
- ・玉島小学校教員研修システム(e-learning)について相談
- ・総社市英語特区における幼・小接続のための授業研究と英語指導者支援
- ・総社市幼稚園児対象「Kid's English@県大」、「英語でサイエンス@県大」2016年～（年2回程度開催）

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・CLIL の効果的な導入方法を明らかにすることは、従来の小学校英語で行われていた「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」活動の促進につながる。
- ・CLIL を通じた小、中、高、大学のスムーズな英語教育接続研究の発展が期待できる。
- ・英米児童文学、アメリカ詩に関する講演等を通して研究成果を社会に還元する。

5 連絡先

kazahaya.yuka@dgn.oka-pu.ac.jp（風早由佳）

移住促進にむけた PR 手法の研究

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 高橋 俊臣

1 研究内容

人口減少、高齢化の影響で、地域の過疎化は確実に進行している。人口減少に歯止めをかけようとイメージ戦略や新たな価値創造活動が活発に行われているが、試行錯誤しながら実施しているのが現実である。良い効果を得るには目的をはっきりさせ、戦略的なコミュニケーション計画を行う必要があり、また創造性の高いアイデアによる手法に力を注ぐ必要がある。

本研究では、短期的に行える PR 活動の効率的な実践にフォーカスを当てる。ターゲットを若年層に絞り、就職による移住や定住先としての選択肢になることを目的とした PR 手法を考察&開発し、実践を行う。手法の開発には、アイデア開発メソッドを使用し、より高い創造性のあるものを目指す。また、効果検証を行い PDCA を回すことで、効率的な PR 手法の解明への足がかりとなるものを見出す。

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・地域創生にむけた PR 活動
- ・地域のブランディング活動
- ・地域のオリジナルグッズの開発、販売チャネルの開拓

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・総社デニムマスクシティプロジェクト（2020 年度）



- ・海と日本プロジェクト（2020年度、RSK）



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・地域 PR の提案、実践
- ・地域 PR のアドバイザー活動
- ・オリジナル商品の開発、販促
- ・地域のブランディング
- ・地域のランドデザイン

5 連絡先

toshiomi_takahashi@dgn.oka-pu.ac.jp

グラフィックデザインにおけるユーモア表現の研究

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 西田 麻希子

1 研究内容

デザインを行う際には、テーマから調査研究を経て、コンセプト主導の取り組みが進行するが、基礎教育段階では柔軟性のある発想力を育成するためのプログラムが必要であると考え。そこで、柔軟な発想に支えられた表現の一つであるグラフィックユーモア表現を念頭に置き、その構成手法に関する研究を行い、柔軟性ある発想力を育成するための発想教育の研究を行っている。成果は学会他にて発表している。

[著書]

- ・「ビジュアルデザインのための発想のスイッチー20 テーマによる分析・演習」吉原直彦 編著・西田麻希子 著（昭和堂、2020）

[口頭発表]

- ・発想教育のための基礎的研究 1-a（日本デザイン学会第 56 回研究発表大会）
- ・発想教育のための基礎的研究 1-b（日本デザイン学会第 56 回研究発表大会）
- ・発想教育のための基礎的研究 2-a（日本デザイン学会第 57 回研究発表大会）
- ・発想教育のための基礎的研究 2-b（日本デザイン学会第 57 回研究発表大会）
- ・プリントメディアにおけるズレの研究ーダブルイメージ広告に見られるズレ（日本笑い学会第 21 回大会）
- ・ユーモアデザインの発想と着地ー画像を使用した発想トレーニングから（日本笑い学会第 22 回大会）

共同研究・受託研究においては、ポスターやグッズ、VI、パッケージデザイン等の各種グラフィックデザインに関する研究を行っている。

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・グラフィックデザイン

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

[審査員]

- ・岡山県統計グラフコンクール審査員（岡山県総合政策局統計分析課、2013～）
- ・禁煙啓発ポスターコンクール一次審査員（岡山県禁煙問題協議会、2016～）

[講座等]

- ・岡山県生涯学習大学主催講座講師（岡山県生涯学習センター、2016）
- ・あの人の行き方に学ぶ講演会（岡山市教育委員会、2017）
- ・高梁川でつながる森・里・川・海の力 2018 ワークショップ（倉敷市、2018）

[共同・受託研究等]

- ・特産商品のブランドのためのネーミングとパッケージデザインの研究（2006）

- ・美術館企画展における広報物についての研究 (2007)
- ・学会における広報物についての研究 (2010)
- ・後樂園のお弁当「お庭そだち」のリニューアルデザインの制作 (2011)
- ・駅弁「後樂園のお弁当」のリニューアルデザインの制作 (2011)
- ・子育て応援事業におけるシンボルキャラクターの開発・運用に関する研究 (2012)
- ・倉敷お土産 POP UP カードの制作 (2012)
- ・文字をメインビジュアルとしたユーモア表現の研究 (2013)
- ・おかやまマラソン入賞メダルデザイン作成 (2015)
- ・後樂園の茶葉を用いた煎茶と和紅茶の「お庭そだち」のロゴの入ったパッケージデザインの開発 (2015)
- ・有限会社中光商店のビジュアル・アイデンティティの開発 (2017～2018)
- ・岡山後樂園における年間パスポート (特別版) のデザイン開発 (2019)
- ・岡山後樂園 マスキングテープのデザイン開発 (2020)

4 今後の研究成果の展開 (社会貢献等の可能性)

- ・各種グラフィックデザインに関する研究

5 連絡先

E-mail: macky@dgn.oka-pu.ac.jp

1 研究内容

テキスタイル素材による造形作品を制作し、国内外の個性的な建築空間において展示するほか、国外研究者との異文化交流、ダンスや音楽など異領域芸術表現とのコラボレーション等においても実践的な研究に取り組んできた。

MINIARTEXTILE 展 (イタリア) → ダンス公演「ボレロ」



近年は、これまでの研究を基に、すべての鑑賞者が身体感覚を通して美術作品と直接触れ合うことのできる体感型展覧会の実践研究を進めている。

通常、美術館・博物館では展示物を視覚的に見せることが大前提とされており、視覚優位の展示が一般的である。本研究においては、「触」をキーワードとして視覚重視の常識に捉われず、五感を通して造形と素材の魅力に出会い、作品の世界を感じとることのできる場と機会をつくり出し、ユニバーサル・ミュージアムの可能性を追求することを目的としている。

体感型展覧会「目の目 手の目 心の目」展、岡山県立美術館、2015年



2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・テキスタイルを用いた空間演出
- ・行為そのものを楽しむワークショップ
- ・体感型展覧会への作品提供

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

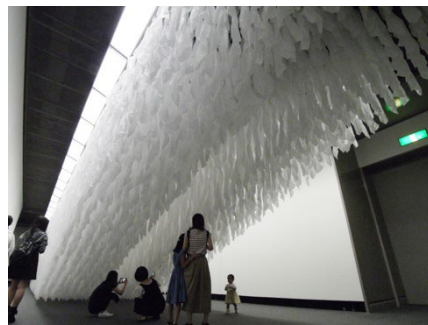
- ・第25回国民文化祭おかやま 2010 閉会式・フィナーレの空間演出
(倉敷市芸文館、2010年)



- ・行為そのものを楽しむワークショップ「テープ! TAPE! てーぷ!」
(岡山県立美術館、2015・2019年)



- ・体感型展覧会「目の目 手の目 心の目」(岡山県立美術館、2015・2019年)



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・2015年に実施した行為を楽しむワークショップを発展させ、2019年には視覚に障害を持つ参加者を受け入れ実施した。今後、このワークショップと体感型展覧会を更に進展させ、障害の有無に関わらずに誰もが楽しめるユニバーサル・ミュージアムの概念を広く発信したい。

5 連絡先

textile@dgn.oka-pu.ac.jp

ものづくりを活用した工芸系デザイン教育と県内文化施設の連携プログラム

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 島田 清徳、難波 久美子、渡邊 操
真世土 マウ、作元 朋子、今田 千裕

1 研究内容

本研究は、大学と文化施設による連携型プログラムを実施し、幅広い年齢層の地域住民に文化体験を提供することにより地域の文化活動を活性化させるとともに、本学の専門教育と地域の結びつきにより豊かな地域文化力を育むことを目的とする。



高梁市成羽美術館
ミュージアムショップ
学生による展示作業

高梁市成羽美術館においては、成羽地域が世界有数の植物化石の産地であることから、地域資産である化石の魅力を発信するために、美術館との連携により学生がミュージアムグッズの開発に取り組み、成果物を同館ミュージアムショップで一般公開する。



岡山県立美術館
研修室
藍染ワークショップの様子

岡山県立美術館では、美術館を訪れる幅広い年齢層が参加できるワークショップを、美術館との連携により開発し、染織・窯焼成等の体験を通してものづくりの魅力を発信する。

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- *すでに以下の県内美術館等と連携し毎年継続して事業を実施しているため、現時点では新たな連携先は求めない。
- ・成羽地域産出の化石をモチーフとしたグッズ開発（高梁市成羽美術館）
- ・染織、陶磁技法によるワークショップの開発と実施（岡山県立美術館）
- ・成果発表会（さん太ギャラリー）

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・高梁市成羽美術館との連携事業（高梁市）
平成26年度から令和4年度まで、9年間継続して実施
成羽地域産出の化石をモチーフとしたグッズ開発
- ・岡山県立美術館との連携事業（岡山県）
平成24年度から令和4年度まで、11年間継続して実施
染織・陶磁技法を中心としたワークショップの開発と実施
- ・連携事業の成果発表（山陽新聞事業社さん太ギャラリー）
平成25年度から令和4年度まで、10年間継続して実施(令和4年度は予定)
大学と美術館の連携事業の成果発表会



さん太ギャラリー
成果発表会
搬入展示作業の様子

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・テキスタイル分野とセラミック分野は、すでに合同して県内2カ所の美術館と連携事業を展開しており、さらに学外のギャラリーにおいてそれらの成果発表会も実施している。また、専門学科を持つ2校の県内高校生をこれらの連携事業や成果発表会に招き、高大接続を推進しており、今後もこれらの取り組みを発展的に継続する予定である。（現在はコロナ禍のため休止）



岡山工業高校 デザイン科



岡山南高校 服飾デザイン科

5 連絡先

textile@dgn.oka-pu.ac.jp

※写真は、新型コロナウイルス感染拡大以前のものを掲載しています。

1 研究内容

本研究は、20 世紀後半の英米の美学における〈作者の意図と作品解釈〉に関する議論を基礎にして、1950 年代後半以降の現代アートの在り方について考察するものである。

芸術の在り方は、1960 年代に大きく変化したということは、多くの論者が——その着眼点や捉え方は異なれど——一致して主張していることである。伝統的に芸術とは、絵画、彫刻、文学、音楽など、固有のジャンルにおいて成立していた。それぞれの作品は、絵画ならば絵具とキャンバス、文学なら文字といったように、そのジャンルに固有な媒体を用いて制作されていた。我々は、その媒体に基づいて、その対象を芸術作品であると認識してきた。しかし、1950 年代後半になると、作家たちは様々なものを作品の媒体として用いるようになっていった。それは、空き缶であったり、廃タイヤであったり、電灯であったり、水や石であったりした。さらに、そもそも作家の手仕事によって作り上げるのではなく、工場などに注文して制作することもあれば、作家自身の身体を作品として用いたり、さらには、そもそも物的対象としての作品を作らないことさえあった。

この時代の変化はかなり多様で広範に及ぶものであり、そのすべてを挙げることはできないが、オーストラリアの芸術家である Ian Burn が論文 “The Sixties: Crisis and Aftermath” (1981) でまとめたように、「芸術実践における脱スキル化」、「物的対象の重要性の減少」、「主題と図像の価値の低下」、「主体としての作者の否定」、「芸術の広告化」、「芸術における性的・人種的区別」、「社会的問題からの作者の離脱」、「芸術のアメリカ化」などが指摘できる。これらは相互に関連しあっており、互いに簡単には切り離しえないが、本研究にとっては、「主体としての作者の否定」が重要な変化である。

本研究では、この問題を取りわけ日本の戦後美術における〈反芸術〉の動向を中心に考察する。とくに赤瀬川原平は、自らの著作のなかで、作者の主体性、オリジナリティ、意図といった観念に対する否定的な考えを早くから表明している。実際、反芸術と呼べる時代の彼の作品は、廃物を使ったオブジェ、コラージュ、パフォーマンス、印刷した紙幣など、作者自身の創造性や技術を発揮する度合いの少ない作品が多い。さらには、ネオ・ダダやハイレッド・センターといったグループでの活動、さらに〈匿名性〉への関心は、彼の活動が美術ではなく、漫画や小説へと移行していった 1970 年代以降にも見られる特徴である。したがって、赤瀬川の活動は、「主体としての作者の否定」という現代アートの傾向の一つを端的に示しており、本研究課題にとって重要な事例となる。

作者の否定は、20 世紀半ばの哲学や文学批評において主流となっていた考え方である。有名なものとしては、フランスの文学者 Roland Barthes によって表明された〈作者の死〉が挙げられる。他方、英語圏では、New Criticism と呼ばれる批評的態度が勃興する。これらは、それ以前のロマン主義的批評、すなわち、作品を作者の個性の表出とみなし、作品理解はすなわち作者理解であるという立場に対する批判から生じてきたものである。

英米の美学（分析美学）においては、M. Beardsley と W. K. Wimsatt, Jr. が 1946 年に発表した論文 “The Intentional Fallacy” において、作品解釈において作者の意図を参照すべきではないと主張したことを発端とし、現在に至るまで議論が続いている。作者の意図への参照を肯定する立場は「意図主義」、否

定する立場は「反意図主義」と呼ばれるが、いずれも極端な立場はすぐに息を潜め、両者を折衷するような主張が主流となっていった。結果、意図を参照するにせよしないにせよ、解釈実践の結果はほとんどかわらないようにみえるまでになったが、依然として、意図を参照するか否かという根本的な対立は解消されていない。

こういった問題の解決には、まず作品制作において意図という概念がどのような役割を果たすかを明らかにする必要がある。この点については、哲学分野において議論がなされているが、それはあくまでも一般的な行為における意図であり、作品制作の際に意図と呼ばれているものとは違いがあるように見える。この点をより細かく分析していくことが課題となる。他方で、作品制作における意図といっても、伝統的な芸術作品、たとえば宗教画のように、聖書の特定の場面を描いた作品の場合と、現代アートの作品、たとえばハプニングと呼ばれる形式のように偶然性などの外的要因が作品の在り方に大きな影響を及ぼす場合とでは、作品に対する作者の意図の及ぶ範囲が大きく異なる。とくに後者のような作品は、作品と作者の意図とを切り離そうとする意図が介在しているため、問題はより複雑になるだろう。

最終的な見通しとしては、意図という概念そのものが作品解釈にとって決定的な役割を果たすものではなく、解釈という行為にどのようにアプローチするかによって、意図の重要性は変化すると考えられる。このことは、しばしば言われる作品解釈の多様性に関わる。すなわち、作品解釈には様々なアプローチがありえるのであって、そのいずれかが正しいというよりも、多様なアプローチを許容することこそが、作品経験の豊かさを担保するものであると結論づけたい。

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・美術資料のアーカイブ化

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

なし

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・現代アートの作品解釈に関する研究を公に公開することによって、広く一般の人々が現代アートに関する理解を深めることに資する。

5 連絡先

kawai@dgn.oka-pu.ac.jp

独自製品の開発を目指す県内企業との多面的共同研究

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 村木 克爾
情報工学部 情報システム工学科 市川 正美

1 研究内容

所属学部が異なる著者等が行っている共同研究は、平成 16 年度から平成 21 年度まで本岡山県立大学が主管した岡山県産学官連携推進会議の協働事業「100 社訪問キャラバン隊」に共に頻繁に参加していたことに始まる。

その実質的な主幹であった本学コーディネータが把握し整理して得た岡山県の中小企業が持つ課題「自社独自の製品開発の切望」を解決する一つの方策として、代表著者が単独で実践していた企業との共同研究スタイルをコアに据えて、大学特有の形態に適合するように工夫された「提案型共同研究」を編み出した。同時に著者等を含む専門が異なる数名の教員がチーム MoDD lab. [Management of Design and Product Development Laboratory] を組織して平成 20 年から活動を始めた。

右に示した一覧は上述の「提案型共同研究」によって商品化あるいは実用化された成果の一部であるが、製造業関係を中心にソフトなコンテンツからハードな内容までを含む多様な業種との共同研究を展開することが可能であることが理解される。これはまた「単一あるいは単発の製品開発」を指向する共同研究とは異なり、著者らが実践してきた活動には事後の継続的な開発に必要な意識・能力をパートナー企業に浸透させ獲得させる啓発的なプログラムも内包している。

本研究活動当初の構成員を維持することは、大学教員の異動が避けられない以上は、難しい。そのため、現在は主に著者ら二名で、岡山県内の企業を主たる対象として、提案型共同研究を継続している。そしてパートナー企業の共同研究の内容に応じて、専門知識を有する教員に協力を依頼してユニットを再構成しながら共同研究を進めている。



2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・既存製品群の再構築
- ・自社ブランド製品・商品の開発
- ・オリジナル製品・商品の開発
- ・新製品・商品の企画・開発

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

著者らがこれまでに行ってきたあるいは現在行っている研究活動において、特に、連携した岡山県内の企業・団体を中心に以下に示す。

- ・オーエム機器株式会社〔岡山県総社市〕
- ・萩原工業株式会社〔岡山県倉敷市〕
- ・井原精機株式会社〔岡山県井原市〕
- ・富士アイ、エム、シー株式会社〔岡山県岡山市〕
- ・株式会社 ホテルリゾート下電 ゆのこう美春閣〔岡山県美作市〕
- ・山県化学株式会社〔岡山県倉敷市〕
- ・株式会社コスモ情報システム〔岡山県玉野市〕
- ・作新化成株式会社〔岡山県岡山市〕
- ・円岩盤石開発センター〔岡山県倉敷市〕
- ・畠山製菓株式会社〔岡山県岡山市〕
- ・株式会社 フジワラテクノアート〔岡山県岡山市〕
- ・株式会社 神馬本店〔岡山県倉敷市〕
- ・株式会社 徳山電機製作所〔岡山県岡山市〕
- ・池田精工株式会社〔岡山県苫田郡鏡野町〕
- ・白菊酒造株式会社〔岡山県高梁市〕
- ・株式会社 半鐘屋〔岡山県津山市〕
- ・株式会社 下電ホテル 鷺羽山下電ホテル〔岡山県倉敷市〕
- ・丸倉青果株式会社〔岡山県倉敷市〕
- ・小田象製粉〔岡山県倉敷市〕
- ・株式会社 奥島手延素麺工場〔岡山県浅口市〕
- ・協和ファインテック株式会社〔岡山県岡山市〕
- ・おかやま食料産業クラスター協議会
- ・岡山県企業誘致推進協議会 企業誘致アドバイザー
- ・おかやま産学官ネット 100社訪問キャラバン隊

以下は、ここで述べた著者等の活動に先行して代表著者が単独で前駆的に行っていた共同研究に関係した県内企業等の一部である。

- ・株式会社 英田エンジニアリング〔岡山県美作市〕※
- ・株式会社 テオリ〔岡山県倉敷市〕
- ・コアテック株式会社〔岡山県総社市〕
- ・岡山米粉麺普及推進ネットワーク
- ・岡山県異業種交流プラザ協議会
- ・岡山県警察 ※※

※ 受賞歴：グッドデザイン賞、グッドデザイン中小企業庁長官特別賞、日本塑性加工学会学会賞。

※※ 表彰歴：本部長表彰

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・岡山県立大学とのパートナーシップの深化
- ・パートナー企業に経営資産としての継続可能な製品企画力・開発力の自足を促進

5 連絡先

電子メール：moddlab@icloud.com

間伐材の需要を促すため、素材を活かした造形デザインの研究

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 南川 茂樹

1 研究内容

間伐材の有効活用は、近年盛んになってきているが、バイオマス発電のための燃料に代表されるようその利用は至って即物的で、間伐材の特性を生かしきれているとは言い難い。本研究は、単に材質を間伐材に換えただけではなく、間伐材を有効活用することから、木材に関心持ち森林を通して環境についても考えるきっかけを生むことを目的とする。間伐材のマイナスの条件を逆手に、デザインアプローチならではの提案を研究する。それによって、代替え材としてではない積極的な使用による間伐材の魅力をアピールする。それを達成するために今年度は、間伐材であるヒノキ・スギの素材そのものに着目し、肌理・香りなど身体感覚に訴えかける要素をテーマに造形デザインに発展させ、デザイン研究し、ヒノキ・スギの良さ、魅力を再確認してもらうことによって、間伐材の可能性を広げることを目的とする。

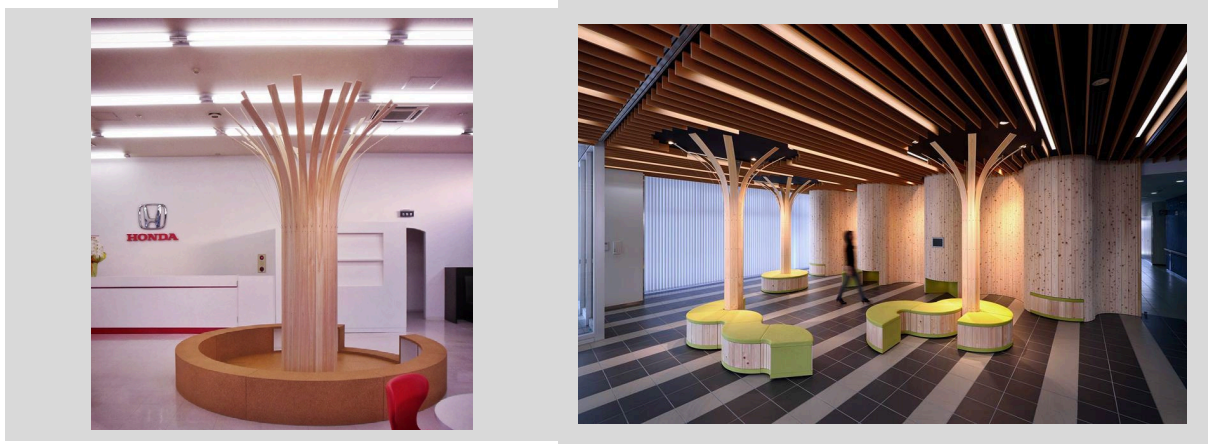


2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・間伐材（ヒノキ・スギ）を用いた家具デザイン
- ・間伐材（ヒノキ・スギ）を用いた空間デザイン
- ・間伐材（ヒノキ・スギ）を用いたプロダクトデザイン

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・ホンダカーズ岡山倉敷中島店ショールームキッズコーナーオブジェ
- ・「パジェロの森」の間伐材を活かしたエコと自然をモチーフとした「パジェロの森シアター」モニュメント（三菱自動車岡崎工場）
- ・岡山市水道局 1F 市民コーナー設計・デザイン
- ・岡山市司法書士会館会議室演台デザイン・制作
- ・岡山県立美術館県美コレクション活用 BOX・日本画編／油彩画編デザイン・制作



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・間伐材を積極的に使用することによって、間伐材の需要が高まり間伐材の価格が安定することで、森林の維持管理が可能になり、環境面での貢献ができる。
- ・間伐材を身近に感じることで、森林の成り立ちに興味湧き、環境について考えるきっかけが生まれる。
- ・間伐材に直接触れることによって、木材の良さを再認識する。

5 連絡先

南川研究室：m3304@dgn.oka-pu.ac.jp

ケア用品のデザイン評価と製品開発への応用

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 三原 鉄平

1 研究内容

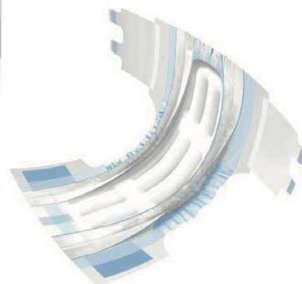
機能低下をサポートする福祉用具やケア用品は、機能性向上や経済合理性では対処しきれない心理的な課題を孕んでいる。また直接的な介入が困難なことから、デザインなど間接的な介入手段の検討が求められている。

本研究の特色は、機能性の向上だけでは対処しきれない製品上の課題において、心理統計学手法を用いて、科学的根拠を伴ったデザインの介入点を明らかにすることにある。さらにその知見を起点としたデザインを行うことで、高齢化社会に資する製品開発を行うことが期待できる。

開発事例



フェミニンケア用品



介護ケア用品



失禁ケア用品

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ケア用品のデザイン評価と製品開発への応用
- ・中小企業におけるデザイン開発支援
- ・デザインを活用した地域コミュニティ支援

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・ケア用品のデザイン評価と製品開発への応用

商品化事例



チャームナップ 吸水さらフィ アクティブショーツ

2018年10月発売

ユニ・チャーム株式会社との共同研究成果。

中高年女性をターゲットとした下着のような使用感の軽失禁対処用品。

- ・ 中小企業におけるデザイン開発支援

商品化事例



TENSION

2006年11月発売
株式会社テオリとの共同研究成果。
竹の剛性と弾性を活かした竹集成材
ダイニングチェア。2007年グッド
デザイン賞受賞。

- ・ デザインを活用した地域コミュニティー支援

商品化事例



真庭市イベント用屋台

2019年1月発売
ゼミ生の卒業研究において、真庭市
産業観光部、(株)村松木工所と連携。
イベント用屋台のデザイン制作を実施。

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・ ケア用品のデザイン評価手法の開発と製品開発への応用
高齢化社会に資する研究や製品開発は、国内における喫緊の課題であると共に、次代の輸出商品としての大きな可能性がある。また心理的抵抗などにより直接的な介入が困難な事象に対して、その成果を正しく評価できれば、デザイン的な介入手法には大きな可能性がある。
- ・ 中小企業におけるデザイン開発支援
社会環境の変化に伴い、地域の活力と雇用を担う中小企業の在り方も大きく変化している。特にコンシューマプロダクトに携わる企業においては、事業ドメインの独自性とストーリー性、それを具現化する為のデザインの重要性は、これまで以上に高まっている。
- ・ デザインを活用した地域コミュニティー支援
今後確実視される高齢化及び人口減少による地域コミュニティーの危機、自治体の財政危機の一層の深刻化などを考慮したとき、行政と住民との協働や住民参加のあり方は、制度的にも実践的にも自治体改革の必須課題であると言える。

5 連絡先

Tel : 0866-94-2045
URL : <http://www.dgn.oka-pu.ac.jp>
Mail : tetsu@dgn.oka-pu.ac.jp

アクティブシニアのコンテンツ制作を支援する プロトタイプツールキット研究

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 石 王美

1 研究内容

ICT (Information and Communication Technology) の活用が難しくないアクティブシニアが増えている。彼らは自分なりの価値観をもち、定年退職後にも、趣味やさまざまな活動に意欲的、元気なシニア層である。平成 28 年の総務省¹の調査によると、YouTube 等の動画共有サービスの利用率は 50 代で 70%以上、60 代でも約 60%という数値が出ており、これはアメリカやイギリスといった世界の先進国の同年代と比較して、高い数値になっている。さらにスマートフォンの増加は環境（ネットワーク、空間）に影響されず、簡単にコンテンツに接することが出来、シニアのコンテンツへアクセスは益々増えることが予想される。

また、コンテンツを生産者として活躍も期待されるが、制作にあたって若者とは違う様々な難しさが生じる。本研究はアクティブシニア層のコンテンツ生産を支援するツールについて調べ、現在のコンテンツ制作のツールと差別するポイントについて明らかにする。研究の結果に基づきプロトタイプツールキットを提案する。

1. 文献調査

ICT の特性と連携技術の傾向について調査する。

現在使われているアクティブシニア向けの ICT 事例調査を行い、考察を出す。

① ITC の特性と連携技術の傾向

ITC (Information and Communication Technology) とは、情報・通信に関する技術の総称でコンピューター技術の活用することを意味する。コミュニケーション機能は、基本で写真、音楽を含め SNS、デジタル本、スケジュールなど数えない機能を持っている。コンテンツを専用マーケットから購入することで無限大で拡張することが可能である。

② アクティブシニア向け既存コンテンツ調査・分析

アクティブシニアは加齢とともに身体機能や認知機能が低下することが一般的で、アクティブシニア向けの製品や ICT は機能を単純化、テキストを大きく

¹ <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/nc132230.html>

するなどの一般の人が使うモノより使いやすさを強調していることが多い特徴がある。マーケット調査を実施し、分析を行う。

2. コンテンツ生産者としてアクティブシニア（技術・デザイン観点）

コンテンツ制作のツールとして一般的に知られている You Tube は動画を中心に全世界的に活用されている。簡単な会員登録だけで誰でもいつでも自分のコンテンツをアップロードすることができる。しかし、動画の編集について詳しくないアクティブシニア層は、コンテンツを制作することに難しさを感じ、あまり編集せずアップロードする人が多いのでコンテンツの企画が良くても若者より綺麗な作品を作ることが難しい場合が多い。Crevo 社は国内外約 5,000 名のクリエイターネットワークを活かし、動画制作・映像制作を有料で支援している。

3. アクティブシニア向けプロトタイプツールキットの提案

本研究はアクティブシニアがよく消費するコンテンツの種類を調べ、誰でも簡単にコンテンツを作れるよう使いやすいコンテンツツールを提案する。このため身体的な特徴を理解することを基準として、使用上の問題点など様々な観点からのアクセスが必要であると思われる。

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ Web デザイン
- ・ グラフィックデザイン（ポスター、チラシ）
- ・ 高齢者向けのインタースペースデザイン
- ・ 各種アプリデザイン

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・ 吉備創生カレッジ教育講座講義（平成 30 年 5 月～6 月、ウェブデザインニング、石王美）
- ・ 赤磐市ホームページ作成委員会アドバイザー（平成 28 年 9 月～嘉数彰彦、石王美）
- ・ 未成年者の喫煙防止に向けたアニメーション映像（平成 26 年、嘉数彰彦、石王美）

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・ 高齢者向けの ICT インターフェースデザイン
- ・ Web デザイン
- ・ アプリデザイン

5 連絡先

石 王美（ソク ワンミ） seok@dgn.oka-pu.ac.jp 0866(94)2079

セラミックデザイン・古代中南米土器

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 真世土 マウ

1 研究内容

本研究では古代中南米土器の分析と再現をおこない、これらを日本の陶磁器技法によって再創造することで、中南米土器の文様や造形デザインを通して、中南米文化を紹介する。同時に、日本陶磁器の素材および技法を海外へ広めることを主な目的としている。また、本研究から生まれる陶磁器作品による展覧会の開催が、日本と他国との交流を深める機会になることも期待される。



ボトルビルダーズ 2021



笛吹きボトル「梟」2019 作

<https://www.youtube.com/watch?v=W79aa4K3N6E&feature=youtu.be>

https://youtu.be/AU_4JNuUGAk

Whistling Bottle Project

古代アンデス文明で作られた多様な工芸品の一つに、器内を流れる空気の圧力で内蔵された笛が鳴るボトル型土器、「笛吹きボトル (Whistling Bottle)」がある。本プロジェクトでは、東京大学総合研究博物館、BIZEN 中南米美術館と東海大学の収蔵品を中心にその構造と製作技術を研究している。研究成果では、そうした土器の X 線 CT による構造分析、レプリカ制作、そして実際にそれらの土器やレプリカを鳴らす実験結果を示すことができた。



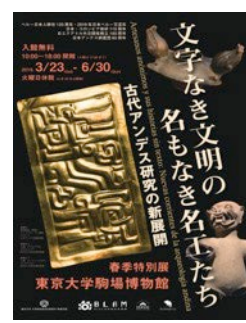
(左より) チョレーラ文化の笛付きボトル土器のオリジナル、X線CT画像、レプリカ

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・製品デザイン（セラミックデザイン開発）
- ・歴史学／考古学／民俗学／人類学／歴史遺産マネジメント
- ・美術（音楽／工芸／彫刻）

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・BIZEN中南米美術館と笠間日動美術館のコラボレーション
（研究発表・展示・ワークショップ）2018年3月17日～5月20日
『古代文明への旅』-アステカ、マヤ、インカまでの道のり-
- ・BIZEN 中南米美術館での研究発表と地域連携「さえずり文明展」2018年10月～2019年10月。この期間中、備前焼の宝山窯、Saezuri Bizen 干支ボトルプロジェクトが行なった（備前焼商品開発）
- ・東京大学駒場博物館での研究発表とワークショップ「文字なき文明の名もなき名工たち」古代アンデス研究の新展開 2019年3月23日～6月30日（共同研究、岡山県立大学・BIZEN 中南米美術館・東京大学総合研究博物館）
- ・東京大学総合研究博物館小石川分館「古代アンデス、壺中のラビリンズ、ボトルビルダース <http://www.um.u-tokyo.ac.jp/architectonica/bottlebuilders.html>



ワークショップ 笠間日動美術館

展示風景 東京大学駒場博物館

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・この研究の目的のひとつに、「伝統工芸である備前焼に応用し、学術的成果の現代社会への還元、文化遺産を活かした地域活性化および国際交流の活発化に寄与する」という取り組みがある。

5 連絡先

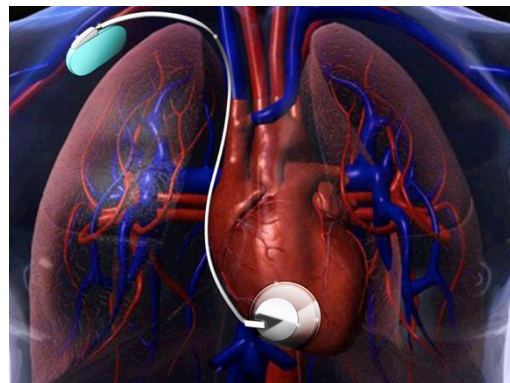
デザイン学部 工芸工業デザイン学科 3206室

新領域へのデザイン提案・素材開発から製品化と商品展開

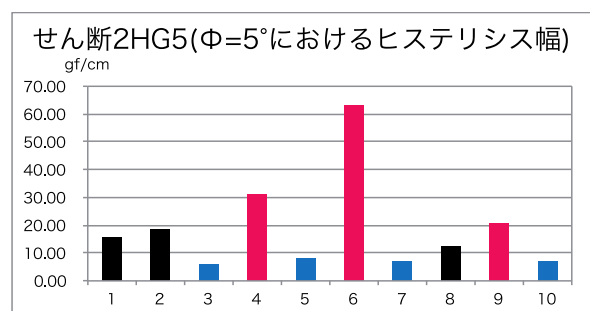
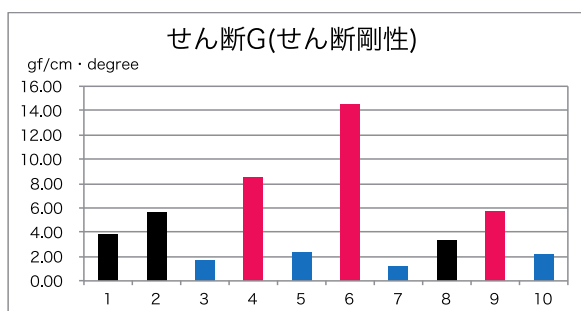
デザイン学部 工芸工業デザイン学科 船山 俊克

1 研究内容

主な研究内容は、新領域へのデザイン提案および新素材開発からの製品化と商品展開である。企業に勤めていたことから、実務としてのデザインによる商品化の経験がある。現在は、これまでデザインが入っていなかった新しい領域へのデザイン提案を中心に研究活動を行なっている。



岡山以前から継続している研究として生地を対象にしたものがある。その風合いの特徴を、感性的・力学的に調査分析し、言語化することで商品への展開を目指すものである。感性的な言語化としては、オノマトペを用いた新しい分類方法の提案があり、力学的な言語化としては KES を用いて数値化するという一般的な方法であるが、商品化されているデニム生地への適応や、防護服に用いられている不織布への適応など、素材自体に新規制がある。現在は、既存の防護服用不織布を用いつつ、パターンによって着心地を向上させるための研究を行なっている。





2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・地場産業・伝統工芸へのデザイン導入：製品化商品展開
- ・企業やブランドの構築から商品整理・新商品開発
- ・感性評価や実験による商品評価に基づく新商品開発

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

2021年の実績としては、竹水を使った化粧水のマーク及びパッケージデザインである。真備町の新興企業が開発展開した商品であり、地元復興のために次期商品展開も行っている。もう一つは、複数の化学的な検査機器を包括的にパッケージ化し、商品価値を高めるというものである。



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・地場産業や伝統工芸の効果的な発信。各種展示会への出展や SNS などを中心とした幅広い広報活動を行うことで、現在の産業や工芸を幅広く発信する。
- ・文化の保存と次世代へ向けた発展的展開。後継者育成を目的とした文化の保存と、その継続のための教育手法を開発研究する。
- ・感性評価や、動物実験などを行うことで、従来曖昧な状態だった現象を情報として整理・分類し、多方面に活用可能な状態にする。

5 連絡先

船山俊克

メール：funayama@dgn.oka-pu.ac.jp

住所：〒719-1197 岡山県総社市窪木 111 3301 室

綿を使用した自動織機・手織機によるテキスタイル研究

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 渡邊 操

1 研究内容

これまで地場産業の活性化を目的とし、綿織物産地（兵庫県西脇市）にある企業と共同研究によるテキスタイルデザイン制作や地域でのワークショップを開催し、技術と共に地域活性化へと繋がる研究活動を行ってきた。



制作したテキスタイルの展示



織物ワークショップ

綿織物産地では高度な技術を持つにもかかわらず、海外との価格競争や経済の低迷により生産量が減少し、その影響により産地からの人口流出や継承者が不足し衰退している。一方で、アパレル市場では高い技術力と融合した、他にない独自性の高いデザインが求められている。そこで、技術的価値・経済的価値・社会的価値の三つ視点を軸とし、手織機では綿を栽培し、糸を紡ぎ、織り、綿の歴史的背景を探究し、自動織機では企業の協力を得てヨコ糸だけが溶けるテキスタイルを制作するなど作品・製品を併せ持つ、独自性の高い新しい可能性へと広がるテキスタイルの研究を行っている。



作品・製品を併せ持つテキスタイル

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・テキスタイルによる地域産業支援（ワークショップ等）
- ・製品デザイン(テキスタイルデザイン開発)
- ・テキスタイルに関する教育的支援

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・織物ワークショップ実施：西脇市岡之山美術館（兵庫県西脇市）
西脇市出身の世界的美術家である横尾忠則氏のポスターを觀賞し、色彩を参考に色糸を選び、織物の制作を行った。
- ・浴衣生地制作および地場産地での浴衣ファッションショー実施
西脇商工会議所（兵庫県西脇市）
浴衣のデザインを提案し、産地にある企業で生産され、浴衣の縫製は学生が行い、ショーを行った。
- ・商品企画および制作指導：生活協同コープこうべ
コープ共済粗品商品企画提案を行い、東日本大震災の継続的な支援を目的とし宮城県の作業所にて制作指導を実施し配布に至った。
- ・トークショーゲスト：デザインクリエイティブセンター神戸（KIITO）
オープン KIITO:出張！元町映画館「YARN 人生を彩る糸」のトークゲストとして編物についてのトークを実施 他多数



織物ワークショップ：ブレスレット制作



浴衣ファッションショー

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

テキスタイルを通じた地域産業支援や教育的支援を行うことにより、これまでの、これからのモノ・コト作りについて考え、本学の学生の学びにも繋がる地域社会貢献へと展開したい。

5 連絡先

岡山県立大学デザイン学部工芸工業デザイン学科
渡邊操研究室
e-mail:misao_watanabe@dgn.oka-pu.ac.jp

積層で作る陶磁器造形とセラミックデザインの研究

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 作元 朋子

1 研究内容

透明感のある磁器の質感や顔料を練りこんだ時の色彩の美しさに惹かれ、ストライプ模様の陶磁器造形を制作、研究している。違う色の粘土が接する境界線が正確な並行になるために、石膏型を使った独自の技法で制作を行っている。ストライプの幅ごとに石膏型を作成し、それぞれの型に流し込んでできたパーツを重ねていく方法で形を生み出しており、模様と造形、技術がうまくひとつになるよう、イメージした形が変わるごとに、成形方法、焼成方法を研究しながら進めている。



また、自己表現としての制作、研究に留まらず、その成果を陶磁器産地の活性化を目的に製品開発にも活かし、陶磁器伝統技術と時代のニーズがうまくあつた製品・アイデアが提案できるよう取り組んでいる。



左：学校の記念碑
右上：植木鉢の制作
右下：瀬戸焼のボタン

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・陶磁器商品開発
- ・陶磁器デザイン制作
- ・石膏や粘土を使った造形教育

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・日本セラミックス協会中国四国支部からの依頼で、セラミックに関する学会での研究部門及び作品部門の受賞者に贈呈するトロフィーの制作をそれぞれの部門ごとに行った。
- ・岡山県農林水産センター農業大学校との共同研究を行い、50周年を記念した校史を表現する記念碑の制作、施工を行った。
- ・岡山県立美術館、寒風陶芸会館、高梁市歴史美術館といった文化施設にて色粘土を使ったワークショップを開催し、陶磁器の魅力を地域の方々に伝えている。



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・作品制作の過程で気づいたことを次の新しい造形制作に生かし、より美しい陶磁器を作り出すことで、文化の振興に貢献できるよう研究を重ねていきたいと考えている。
- ・セラミックデザインは、住居、環境造形など様々な場面で生かされており、陶磁器ならではの特徴を生かしたデザインや、地域の産業と結びついた展開が可能である。
- ・可塑性のある粘土は造形意欲を刺激する素材である。年齢を問わず手でモノを作る行為を通して豊かな情操教育に貢献していきたい。

5 連絡先

作元朋子 harada@dgn.oka-pu.ac.jp

英語による拡張現実インターネットサイトの設計に関する研究

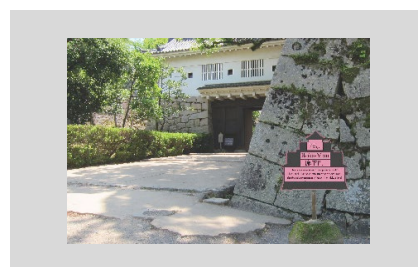
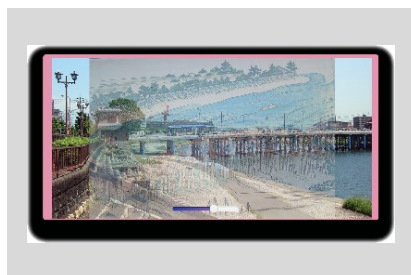
デザイン学部 工芸工業デザイン学科 ブルネリ・アンソニー

1 研究内容

この研究は、観光旅行者の観光体験を補うために、英語による旅行者向け拡張現実（AR）のインターネットサイトの設計を目指している。近年の情報技術の趨勢は双方向性を高める傾向にあり、拡張現実（AR）は産業デザイン、ツーリズム、翻訳、教育、医療、交通情報、テレビ、コンピューターゲームの分野にも着々と進出している。一方、日本政府は外国人観光客の誘致を推進しているが、岡山に外国人観光客を招き寄せるには、単に英語の使用を増やすだけでは十分ではなく、最新のテクノロジーを利用することが重要と考えられる。この研究では英語と最新のテクノロジーを利用し、両者のメリットを活用して、岡山の観光に特化した、スマートフォンやタブレットでの利用を想定した拡張現実的サイトをデザインした。



計画では、双方向性を維持し、モバイル機器を通して利用者が個人のニーズに即したリアルタイムな情報を入手することを可能とし、各自の観光体験の拡充と訪問地に関する適切な情報に容易にアクセスできるようにした。このようなサイトを利用することによって、観光客は他では得がたいユニークな経験をすることとなる。



2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 地域を活性化するアプリケーションの開発の相談

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・ worked with the Okayama City Tourism and MICE Promotion Division on the possibility of developing such a program
- ・ used Himeji Castle as a starting point and found many good points and problems that could be developed and corrected for Okayama Castle
- ・ set up a mock prototype of the AR application

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・ research new and attractive augmented reality possibilities for Okayama Castle
- ・ experience and understand how other castles throughout Japan are promoting their sites in English
- ・ find unique ideas to put into the design of the augmented reality application so that the app for Okayama Castle will stand out above all others

5 連絡先

brunelli@dgn.oka-pu.ac.jp

情報デザイン：情報提示の手法とそのインタフェースの研究

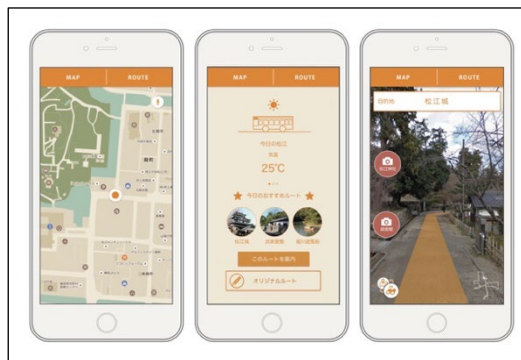
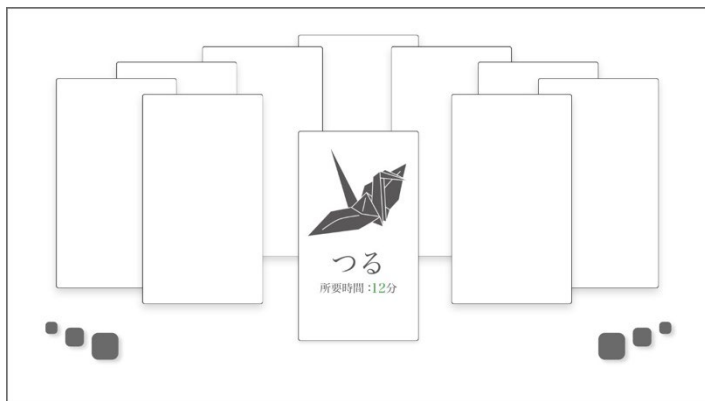
デザイン学部 工芸工業デザイン学科 尾崎 洋

1 研究内容

VR や AR などの情報提示の方法は、近い将来より一般化するであろう。ヘッドマウントディスプレイ（英語：Head Mounted Display。以下、HMD と記す）やスマートフォンを利用した AR や VR においても、情報とそのユーザーとの関わりを考えるとデザインは重要な視点となる。これらの近い将来一般化するであろう情報提示の技術を見据え、理解しながら、情報デザインを研究している。

現在、HMD を用いた VR を利用した情報提示およびそのインタフェースを、制作を通じて研究を行っている。

研究室所属の学生の卒業研究として、スマートフォンを用いた AR 表示の提案とそのデザインやインタラクティブなマニュアルの提示手法の提案などを行っている。さまざまな情報提示の方法の技術の理解を理解し、その有効なデザインとその手法について、制作を通じて、模索・研究を行っている。



2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 情報発信とその手法についての提案
- ・ 情報提示とその技術における情報デザイン
- ・ GUI など情報デザインの提案

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・ FaithCreates Inc.（兵庫県神戸市）との共同授業（演習授業）
FaithCreates Inc. が、提供しているアプリ・ウェブサービスであるスタンプリャーサービス「RALLY」を利用した企画の提案とそのデザインを演習授業で行った。
- ・ フェンリル株式会社（大阪府大阪市）との共同授業（演習授業）
UX / UI デザインとアプリ開発のプロフェッショナルであるフェンリル株式会社とアプリバイタル情報を用いたスマートフォンアプリというテーマで、その企画提案とデザインを行った。
- ・ 井山宝福寺（岡山県総社市）
ウェブサイトを用いた情報発信とデジタル・アーカイブ手法の模索



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・ 情報発信および情報提示の手法についての提案
- ・ インタフェースについての提案

5 連絡先

メールアドレス：ozk@dgn.oka-pu.ac.jp

デザイン検証モデル制作工法の研究

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 中原 嘉之

1 研究内容

従来の製品開発におけるデザイン検証モデルの用途は、その形状の検証が主たるものであった。しかし、現在はその物の使い勝手、周囲の環境など、様々な要因を加味しての検証が不可欠となっている。また、デザイン開発初期段階でのスタイリングに関する検証はデジタルデータを活用したCGでの検証が多く行われており、デザイン検証モデルの求められている仕様が、より実際の使用状況を再現できる物に変化している。

本学保有の施設、アトリエ棟には木材工房・金属工房をはじめとした素材に応じた複数の工房施設がある。この施設を用い、デザイン検証の初期段階で行われてきた簡易モデル(ラピットプロトモデル)制作を、よりリアルマテリアルに近づけた素材で制作を行い、精度の高いデザイン検証を行う。

木材工房案内図 NCルーター室・金属工房・溶接室案内図

① 木工くい旋盤	⑩ 手押かんな盤	⑲ 経上げ旋盤
② パネルソー	⑪ 自動かんな盤	⑳ 油圧プレス機
③ 角ノミ盤	⑫ 丸鋸昇降盤	㉑ 丸カット帯鋸盤
④ 帯鋸盤	⑬ ルーターマシン	㉒ 大型糸鋸盤
⑤ スライドソー	⑭ コーターマシン	㉓ コーナロックンマシン
⑥ ジャンピングソー	⑮ 高速面取盤	㉔ 木工プレス機
⑦ 水平式ボーラー	⑯ ベルトサンダー	㉕ 両眼グラインダ
⑧ 木工ろくろ盤	⑰ ボール盤	
⑨ 糸鋸盤	⑱ リップソー	

① NCルーター	⑩ 金工帯鋸盤
② 三次元加工機	⑪ 金属切断機
③ NCドリル	⑫ シャーリングソー
④ 精密旋盤	⑬ TIG溶接機
⑤ フライス盤	⑭ レーザーカッター
⑥ タッピングボール盤	⑮ サンドブラスト
⑦ パイプベンダー	⑯ ガス溶接機
⑧ 両眼グラインダ	⑰ フラスマッカラー
⑨ 折り曲げ機	

その為に、CAD を利用したデジタルモデリング、及び NC 加工機や3D プリンタ、レーザーカッター等、デジタルデータを利用した自動加工機の加工技術の研究を行う。また、それぞれの加工設備の長所を組み合わせ、より短時間、高精度なデザイン検証モデルの制作工法の研究を行う。

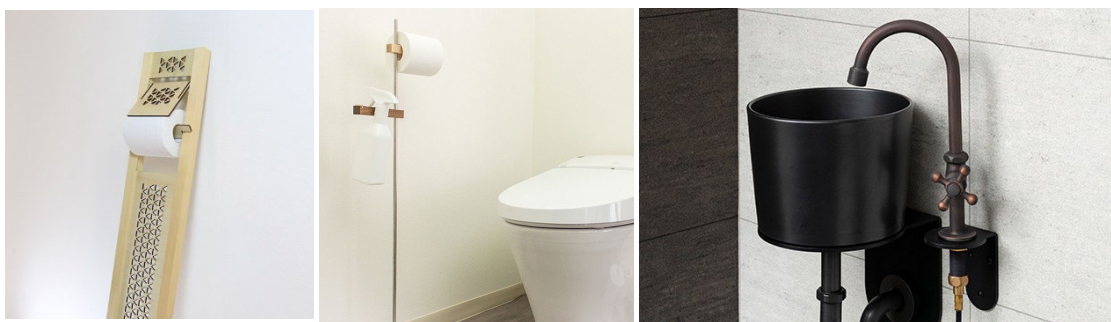


2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・デザイン検証モデルの制作及び検証
- ・I/O デバイスを用いた UI・GUI 検証に関する研究
- ・木工工具を用いた教育効果に関する研究

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・株式会社足立石灰工業 といれたす “たてかける”
- ・株式会社足立石灰工業 といれたす “BRANCH”
- ・株式会社足立石灰工業 といれたす “POCKET”



- ・福島県南相馬市一仮設住宅お茶室移設プロジェクト
- ・総社市一県大キッズキャンパス



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・企業とのデザイン開発、及び、検証モデル制作とその検証
- ・NC 加工機等の自動機械を用いた試作部品製作の技術指導
- ・CAD デジタルモデリングの技術指導

5 連絡先

TEL : 0866-94-2173

Mail : ynakahara@dgn.oka-pu.ac.jp

蠟染め技法を用いた染色表現の研究

デザイン学部 工芸工業デザイン学科 今田 千裕

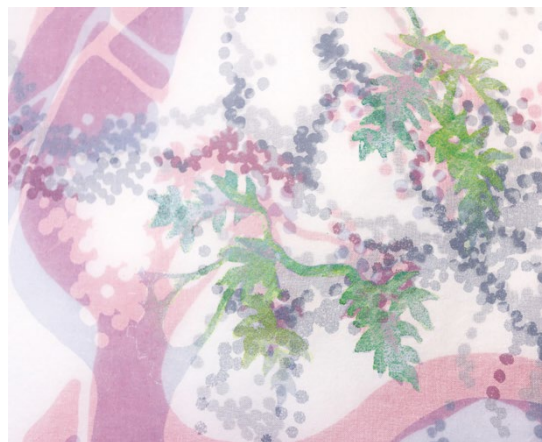
1 研究内容

蠟染め技法を主体に、テキスタイル分野における染色技法と、鉱物顔料を取り入れた手法を模索し、作品制作、研究を行っている。鉱物顔料の材質感や透過性のある布の重なり効果などを組み合わせることで、素材の特性を活かしつつ色材による材質感を取り入れた染色表現の研究を継続している。



第三回全国大学選抜染色作品展 展示作品 (2022年)

現在は扱う染色技法の手順に着目し、蠟染め以外の防染技法や捺染など他の染色技法を応用し、混合技法として用いることで、より効果的に色と材質感の両方を活かした染色表現の展開を目指している。



「NIF・YOUNG TEXTILE2022(JAPANTEX2022)」展示作品 (2022年)

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・染色技法を用いたテキスタイル表現の研究
- ・テキスタイルデザイン制作

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・岡山マツダ野田店ショールーム壁面展示



岡山マツダ野田店 展示作品（2022年）

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・独自の染色表現の発展を目指した作品発表を継続し、文化振興に貢献できる研究へと繋げていく。
- ・テキスタイルと地域に根付いた特産物を組み合わせたワークショップ等を提案、実施していくことで、文化面での社会、地域貢献への展開を目指していきたい。

5 連絡先

chihiro_imada@dgn.oka-pu.ac.jp

形態可変構造の設計手法に関する研究

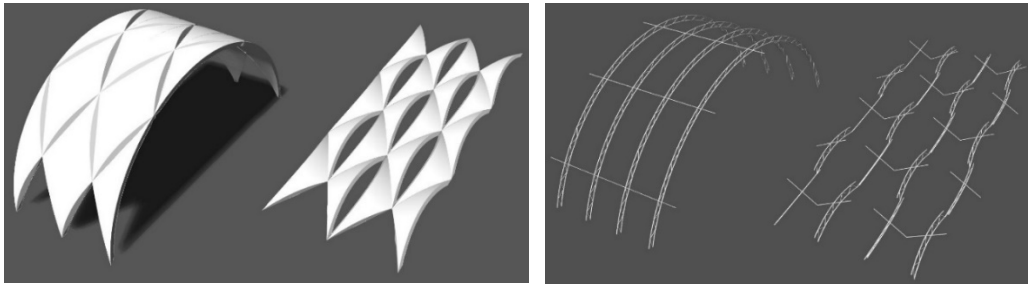
デザイン学部 建築学科 津田 勢太

1 研究内容

建築への活用が可能な機構（展開構造）の提案とその設計手法を研究テーマとしている。主な機構の種別は、剛体折紙を利用した機構やシザーズ要素を利用した機構である。

剛体折紙とは、折れ線のみが回転可動部でその他は剛体でも折ることができる折り方のことでありミウラ折り、ヨシムラ折りなど多数存在する。この剛体折紙を機構として直接利用して、仕上げ兼用の剛な構造版を丁番で接合することで展開構造とする手法もあるが、剛な構造版は自重が増えるため移動や展開に相当な労力が必要となる。そこで本研究室では、折紙の展開過程を活用し、リンク部材は板ではなく骨組として機構生成する手法について研究している。骨組とすることで変形しない軽量パネルを使用した展開構造が生成できる。

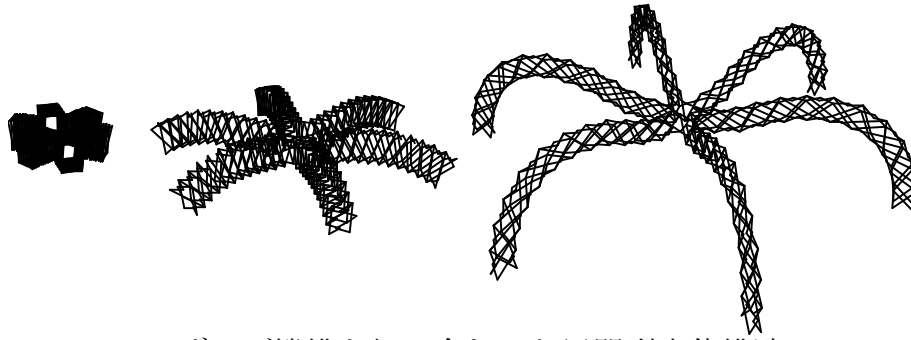
シザーズ機構は展開能力が高いため古くから様々な分野で利用されており、建築構造体としても近年活発に研究・提案されている機構である。建築で提案されているものの多くは大空間屋根構造を面として生成するものであり、仮設支保工が不要となるため、開閉式屋根や組み立てテントなどとしての提案である。本研究室では、平面シザーズ機構を複数個連結して角柱型にしたシザーズ機構をユニットとし、複数の角柱ユニット同士を端部で連結することで立体的・空間的に拡がりのある構造体を生成する手法を研究している。シザーズ要素の形状や組み合わせ方を変えることで様々な形状を生成ができ、展開型の立体骨組や開閉式大空間などへの活用を提案している。



剛体折紙から生成した展開型空間構造



3次元湾曲型のシザーズ角柱



シザーズ機構を組み合わせた展開型立体構造

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・展開型構造を利用した建築構造に関する研究
- ・メカニズムを利用した制振装置等に関する研究
- ・最適設計を用いた建築構造デザインに関する研究

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・（一社）岡山建築士事務所協会／岡山県耐震診断等委員会・副委員長
- ・岡山県建築住宅センター（株）／構造計算適合性判定専門委員
- ・真庭市／落合支局庁舎並びに落合地域総合センター建設工事設計プロポーザル・審査委員
- ・早島町／天井等落下防止対策協議会・会長
- ・総社市／総社市立学校施設耐震化事業評価審査委員会・委員長
- ・岡山県備中県民局／「木造建築のこれからを考える」講師
- ・笠岡工業高校／地域人材育成事業「3Dプリンタの現状と将来展望」講師
- ・岡山県警／災害訓練ユニットの制作指導

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・展開型シェルターなど，災害復旧のための構造開発

5 連絡先

Email: tsuda@dgn.oka-pu.ac.jp

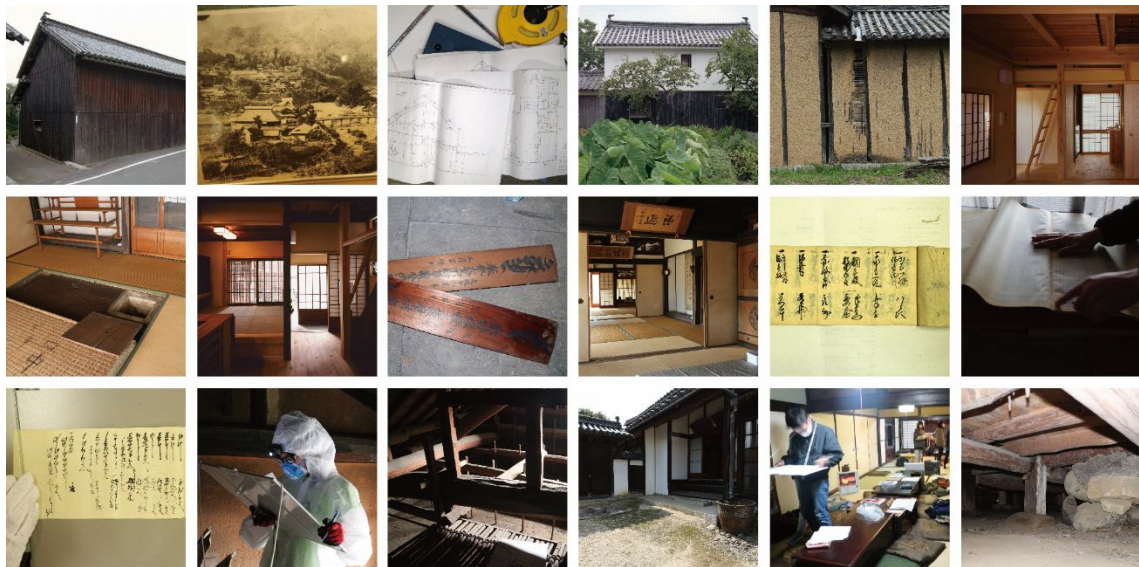
歴史的価値のある建築の活用計画

デザイン学部 建築学科 福濱 嘉宏

1 研究内容

近年、全国各地で「古民家」という言葉を冠した商業施設などを頻繁に目にするようになった。ここでいう古民家の多くは、戦前に建てられたものを指す。これらの古民家をはじめ生活に根ざした古い建築は、文化や技術において価値の高いものが見られるが、その活用を誤ると、これらの価値を毀損するばかりでなく、その伝承も絶やすことになる。そのみならず、耐震性や老朽化の確認を怠った場合は人命を危険にさらすことになる。こうした誤った古建築の活用を避けるために、初期段階でじゅうぶんな調査をおこない、文化的価値の判定や構造的安全性の確認を支援する。

つまり、個々の建物を正しく活かし、かつ後世に残すための調査研究である。



2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・古文書解読など建築物の史料調査
- ・文化財登録
- ・伝統家屋の実測調査から図面作成、耐震設計まで

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・台東区谷中・上野桜木における民家の保存と活用
- ・総社市・山田プロジェクト実行委員会

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・文化財の保護
- ・観光資源の創出
- ・郷土愛の揺籃
- ・生活道具の保存展示



5 連絡先

Tel : 0866-94-2057

E-Mail : hukuhama@dgn.oka-pu.ac.jp

閑谷学校の歴史的・文化的価値に関する研究

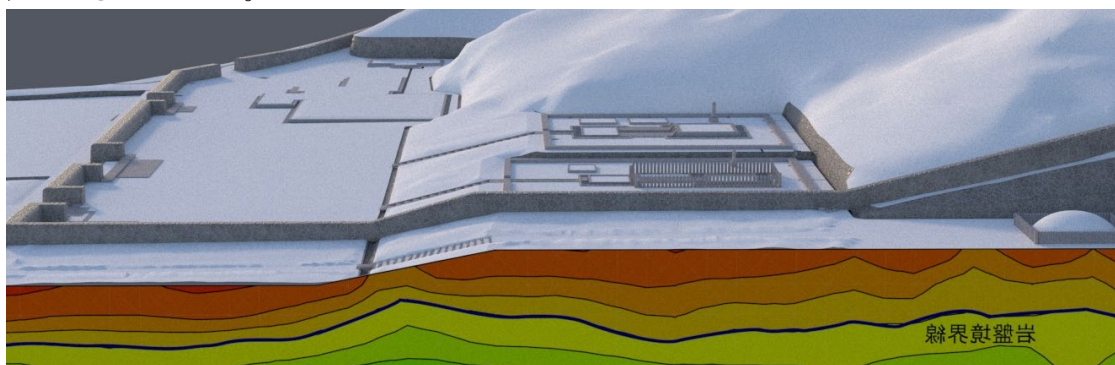
デザイン学部 建築学科 向山 徹

1 研究内容

本研究の目的は、閑谷学校を「雨の器」という環境技術的な観点から再評価することである。特に、一昨年（2023年）の西日本豪雨の際には、岡山県の真備町が甚大な被害を受けたことから、雨水を受け止める多様な技術の在り方を再考すべきであり、そのための指標が閑谷学校の水利技術にあると考えた。普請奉行を務めた津田永忠は、先立つ岡山藩の新田開発や水利事業において、多くの実績を残しているが、これらの技術をこの閑谷の地に「雨の器」として凝縮させた。この技術を、歴史的な「学びの場」としての営為と重ね合わせることで、これから人類が直面する気候変動や、急速で巨大な情報化による社会環境の変化をしなやかに調和させるための社会基盤構築の前提となる「人と自然とのかかわりの所作」を我々に示すであろうと考える。具体的には、地盤・礫層・暗渠・吸い込み井戸・石堀・石積・水路などの石による水利技術を3次元的に詳細に表現しながら、「人と自然とのかかわりの所作」をより繊細で緻密な環境技術として可視化することで、これからの環境の時代の指標のひとつとして、閑谷学校を位置づけることができると思う。



現在、調査の深度を上げ、表面からは不可視な下層の流紋岩質の地盤から暗渠・礫層および、雨水の様態を地盤探査によって解明すべく、3次元的に可視化する作業を始めている。下に示すのは、上記3Dに地盤調査による地盤構造を融合したものである。

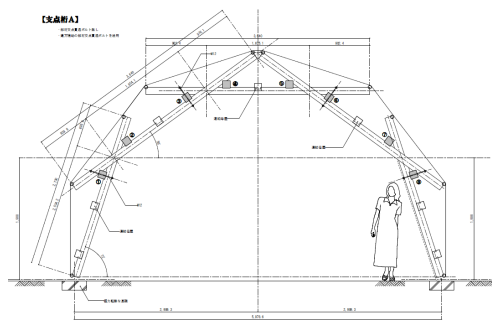


2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ① 世界遺産を目指す閑谷学校の、歴史的・文化的価値をより深めるための
実地調査、および他の文化遺産（後樂園・吉備津神社など）の実地調査
を通じて、岡山に眠る自然と建築がつくる環境としての文化遺産の価値
を可視化していく研究。
- ② 木材利用促進のための建築設計技術開発もしくは設計。（地域材・CLT）

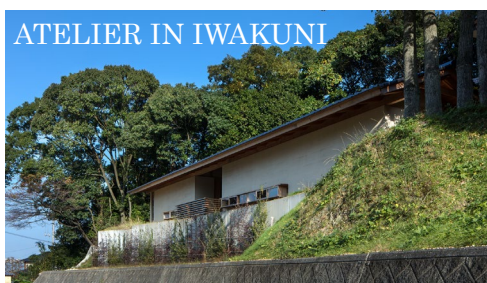
3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

広島県廿日市市（市産材活用モデル事業 木造のビニールハウスの設計）
（H28）廿日市市からの委託を受け、雪深い山地の畑地に設営される廿日市
市材を使った木造のビニールハウスを開発設計・工事監理を行った。



4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

岡山は、昨年の豪雨災害で甚大な被害を受けました。予期せぬ自然の猛威の前に、改めて建築に従事する我々の意識も変わらざるを得ない状況があります。長い目で見た岡山の歴史や風土の見直しと、地域に根差した建築の設計技術・施工技術が求められると考えます。幸いにも岡山には、後樂園など、人と自然との関係を見事に形象化した遺産があります。これらの遺産の価値を認識するためのフィールドワークなどを通じ、地域の建築文化の創造に貢献する研究を展開し、実作を手がけ実践していきます。



5 連絡先

〒719-1197 岡山県総社市窪木1 1 1 岡山県立大学建築学科
e-mail:mukouyama@dgn.oka-pu.ac.jp/ TEL:0866-94-2059

1. 場を活かした建築空間の理論及び実践研究
2. ドイツ近代建築の造形システムに関する研究

デザイン学部 建築学科 吉田 豊

1 研究内容

場を活かした建築空間に関する理論及び実践研究を行います。気候・風土・周辺環境など、場所の特性を丁寧に読み解き、建物単体だけではなく、街並みの環境までを視野に入れた、新しい環境体の創造の実践研究に取り組みます。

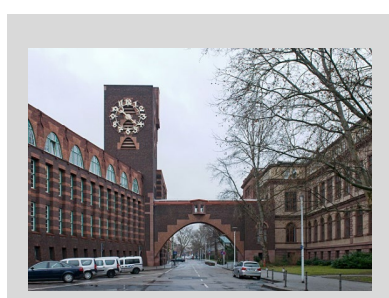


庚午の家

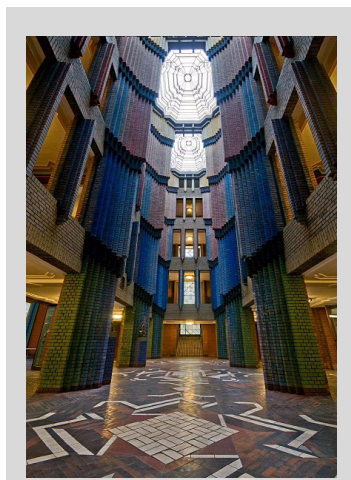
緑ヶ丘の家

海田の家

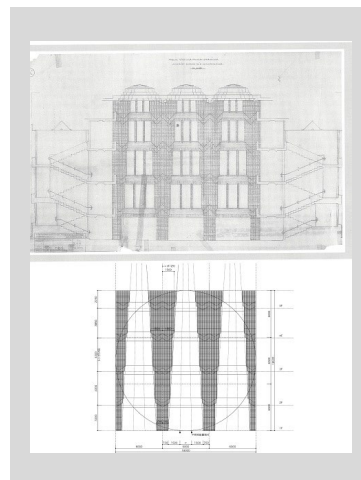
ドイツを中心とした、近代建築の造形システムの研究を行います。とりわけ近代ドイツの中心的人物であり、表現主義建築の代表的存在であるペーター・ベーレンスの建築作品に焦点をあて、ベーレンスの設計に潜む幾何学的操作の手法に注目します。同時代のオランダ建築家の幾何学操作や、建築教育活動を通じた芸術家との交流から、幾何学への興味の影響を受けたとの作品単体での先行研究があります。ここでは、ベーレンスの建築作品を通史的に捉えた際の、造形操作に一貫して潜む幾何学思想に着目し、形態システムの解明を試みます。引いては近代建築に潜む幾何学思想や、ベーレンスに続く次世代への影響などまで、ドイツ近代建築の再解釈に取り組みます。



ヘキスト染色工場 外観



ヘキスト染色工場 内観



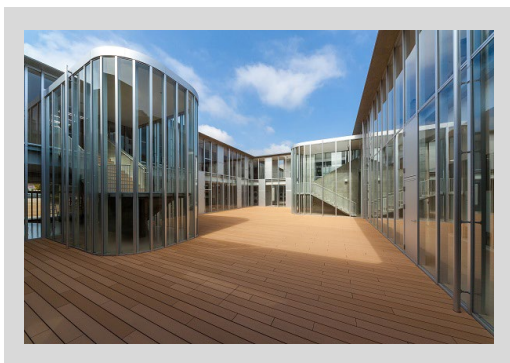
幾何学解析例

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 建築設計
- ・ 近代建築史
- ・ 建築・街並みの保存・活用
- ・ 地域に根差した建築の配置および工法研究

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・ 広島県主催 県立広島学園(東広島市立もみじ小学校・もみじ中学校), 広島県立広島学園整備工事に伴う基本及び実施設計委託公募プロポーザル, 最優秀賞, 2012
- ・ 広島県主催 ひろしま建築設計 U-40 2015(実施前提の公衆トイレのコンペの審査) 審査員
- ・ 広島県主催 ひろしま建築学生チャレンジコンペ 2015
(実施前提の公衆トイレのコンペの審査) 審査員
- ・ 広島県主催 「小嶋一浩×土井一秀×吉田豊トークセッション&パネル展示会 2016 inTAU」,
広島型プロポーザルコンペについてのディスカッション, パネリスト
- ・ 広島県主催 広島南警察署建設工事に伴う基本・実施設計委託の公募型建築プロポーザル,
最優秀賞、2019



県立広島学園(2015年完成)



広島南警察署(2023年完成予定)

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・ 設計研究の実践を通じた「場を活かした建築空間の理論」を公共建築のプロポーザルコンペへの積極的に参加などを通し、実践研究を行い、良質なで新しい環境の創出
- ・ 建築・街並みの歴史的再評価や保存・活用への参画
- ・ 地域に根差した建築の配置および工法研究

5 連絡先

岡山県立大学デザイン学部建築学科

TEL:0866-94-2058（直通） TEL:0866-94-2064（事務室） email:yoshida@dgn.oka-pu.ac.jp

戸建て住宅のデザインの研究—総社市に建つモデル住宅「繋」—

デザイン学部 建築学科 西川 博美

1 研究内容

本研究は、2018年度に株式会社エス土地調査企画よりモデル住宅の共同研究の依頼を受け、西川研究室に所属する大学院生と学部生と共に、基本プランの検討をスタートさせ、2021年度に、実際にモデル住宅を実現させたものである。

依頼主からは、4人家族を想定し、友人家族を交えてホームパーティが出来ること、趣味に取り組めるような部屋を設けることなどの要望を受けた。与えられた敷地は、総社市井手の田園が広がる地区であった。

これらを前提条件に、我々がこだわったのが、周辺の自然環境をどのようにしたら室内空間に取り込めるかという課題であった。敷地に隣接した場所に新たな道路敷設の計画もあり、周辺環境は今後も変化していくことが予想されている。しかし、たとえどのような環境になったとしても、周囲の気配が家の中でも感じられるように、外に開いた住宅にしたいという思いから、設計案は何度も修正が加えられていった。

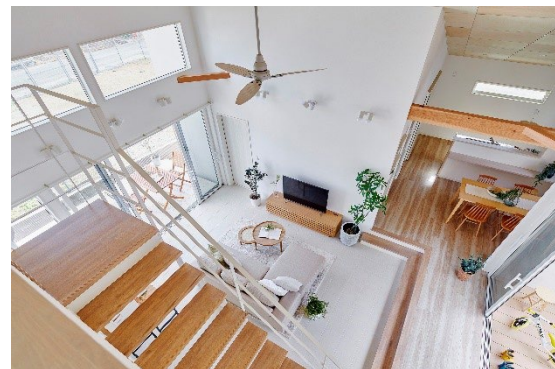


基本プランを解説する学生



外と内を繋ぐリビング・テラスの提案

そして2021年11月末に、モデル住宅「繋」が竣工した。吹き抜けと大きな窓を持つリビングを中心に、ダイニング、キッチン、そして寝室や2階の子供部屋へと繋がっている。更に、リビングの前後には広いテラスが設けられ、外と内を繋いでいる。開放的なリビング空間とは対照的に、寝室だけでなく、趣味や在宅ワークなど、さまざまな生活様式を想定して複数の小部屋を用意した。こうして、人と人が繋がり、さらに周囲の環境にも繋がる住宅が完成した。

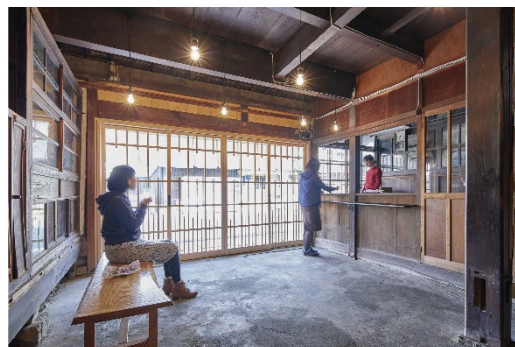


2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 歴史的建物を活用した施設等の提案
- ・ 歴史的まちなみにおけるまちづくりの提案
- ・ 駅や広場等の公共空間を活かしたまちづくりの提案

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

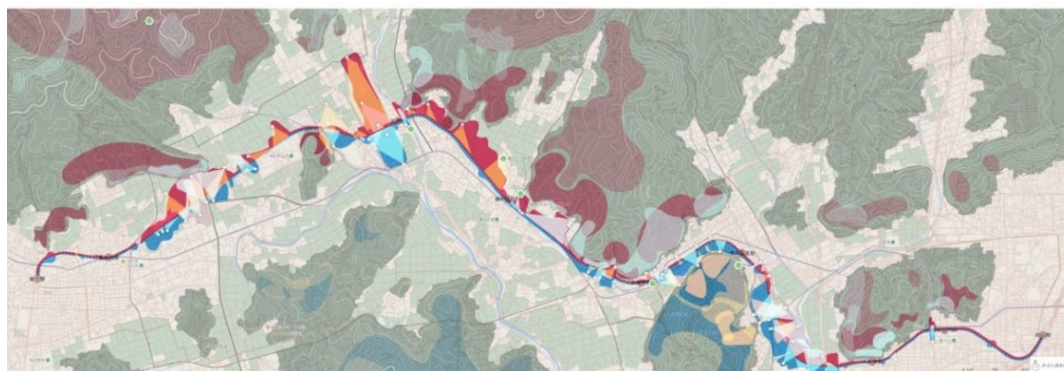
2016年度から2018年度に亘り、陣屋町足守地区のまちづくりに取り組んだ。初年度は町並みの建物実態調査を実施、次年度は1軒の歴史的民家のリニューアル計画、3年目は旧薬局「野崎邸」の改修を行い、地域の人々へ開いたスペースへと再生させると取り組みを行った。



陣屋町足守地区に建つ旧薬局「野崎邸」の再生
改修内容の提案から改修工事まで授業「都市環境調査」履修生と西川研究室の学生で実施した。

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

当研究室では、住宅だけでなく駅空間をテーマにした研究も行っている。主にローカル線の無人駅に着目し、駅や路線が町とどのようにして繋がるかについて研究を進めている。住宅が集まり町が形成され、そして駅や広場などを中心に拡大していく。地域の形成を考えると、公と私の両方の建物を、更なるその景観を検討していくことが大切であると考えている。



JR 桃太郎線沿線の景観分析図

5 連絡先

nishikawa@dgn.oka-pu.ac.jp

災害時の木造応急仮設住宅建設に関する研究

デザイン学部 建築学科 畠 和宏

1 研究内容

本研究は、高い居住性を有し、使用後の再利用を前提とした木造仮設住宅の様子の検討と生産・供給体制の整備を主な目的としている。

地震や台風をはじめとした自然災害は毎年のように発生している。家屋被害による避難所生活や、その後の仮設住宅での生活は被災者にとって大きな身体的・精神的ストレスを与える。特に仮設住宅での生活は長期化することが多いため、より良い住環境が求められるべきである。従来は「仮設住宅＝プレハブ」というのが定説であったが、東日本大震災で福島県を中心に多くの木造仮設住宅が建設されたことを機に木造仮設住宅への注目が高まっている。

木造仮設住宅は、木造ならではの高い居住性はもちろん、木を組んでビス止めとすることで解体・再利用が容易であるという利点がある。東日本大震災で建設された木造仮設住宅の一部は、後に復興公営住宅として再利用されたり、他の用途（宿泊施設や事務所・一般住宅など）の建築にも転用され、その有効性は実証済みである。2018年には、東日本大震災の際に福島県いわき市に建設され約7年間仮設住宅として使用された木造仮設住宅が西日本豪雨で被災した岡山県総社市に移築され、再び仮設住宅として利用された【写真1・2】。このように、木造仮設住宅は仮設住宅としての利用にとどまらず、その後の再利用を踏まえた長期的な活用が可能であり、資源循環や廃棄物の抑制などといった環境問題にも貢献できる。

研究者は、東日本大震災における福島県での木造仮設住宅建設に関わり、その後、東日本大震災で建設された福島県内の木造仮設住宅に関する研究を行った（木造仮設住宅の構法と生産性及び維持管理に関する研究-東日本大震災における福島県内の木造仮設住宅を例に-、畠和宏, 2012）。また、2018年のいわき市から総社市への移築建設プロジェクトにも携わった経験を有する。

2012年と2018年には、仮設住宅の入居者を中心とした被災者の交流活動の一端として、木造仮設住宅の建設過程で生じた端材を使って家具をつくるワークショップを企画・開催した【写真3】。このイベントは、住民間だけでなく、普段あまり関わることはない学生や建設に関わった大工らと住民の交流促進にも有益であった。このような交流活動が可能となるのも、仮設住宅を木でつくる利点である。

東日本大震災では、仮設住宅入居後の孤独死や孤立が大きな課題として浮かび上がった。被災者にとって仮設住宅への入居はゴールではなく、新たな生活へのスタートであるともいえ、仮設住宅入居後の継続的な支援も不可欠である。



【写真1】総社市に移築された木造仮設住宅



【写真2】木造仮設住宅の内観



【写真3】家具づくりワークショップ(2011)

東日本大震災以降に建設された木造仮設住宅を概観すると、その仕様はさまざまであり、軸組構造部材のみを木造とするものが多いのが実情だ。それらは解体や再利用を前提とはしておらず、石油化学製品を多用しているため、使用後は大量の廃棄物を生んでしまうこととなる。木造で仮設住宅を造るのであれば、やはり解体やその後の再利用まで十分に考慮されたものであるべきである。そのためには、迅速な供給を可能にする生産・供給体制の整備と、高い居住性を確保し、使用後の再利用を前提とした木造仮設住宅の仕様の検討が急務である。そこで、これまでの再利用事例などにおける有効性の検証と、その知見を踏まえた木造仮設住宅の規格化に関する研究を行っている。

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 災害時の木造応急仮設住宅建設について
- ・ 仮設住宅をはじめとした災害時の住まいの整備に関する研究
- ・ 被災時の住民間または地域でのコミュニティ形成
- ・ 木（端材など）をつかった家具づくりワークショップ など

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・ 西日本豪雨における木造仮設住宅移築プロジェクト（岡山県総社市）
- ・ 端材を利用した家具づくりワークショップ@いわき市（2012年）
- ・ 端材を利用した家具づくりワークショップ@総社市（2018年）【写真4】
- ・ 木造仮設住宅の塗装ワークショップ@総社市（2018年）【写真5】
- ・ おかやま緑のネットワーク 2018 セミナー講演会「木造仮設住宅の移築・再利用にみる可能性とこれから」（2018）【写真6】
- ・ 板倉構法による木造仮設住宅の再利用における有効性の検証と規格化に向けた研究（株式会社里山建築研究所との共同研究）



【写真4】家具づくりワークショップ(2018) 【写真5】塗装ワークショップ (2018) 【写真6】講演会のようす

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・ 木造仮設住宅の規格化による災害発生時の迅速かつ良質な仮設住宅供給
- ・ 災害時を想定した仮設住宅供給体制の整備やコミュニティ形成支援

5 連絡先

岡山県立大学デザイン学部 畠研究室 hata@dgn.oka-pu.ac.jp

エリアリノベーション時代の生活景に関する研究

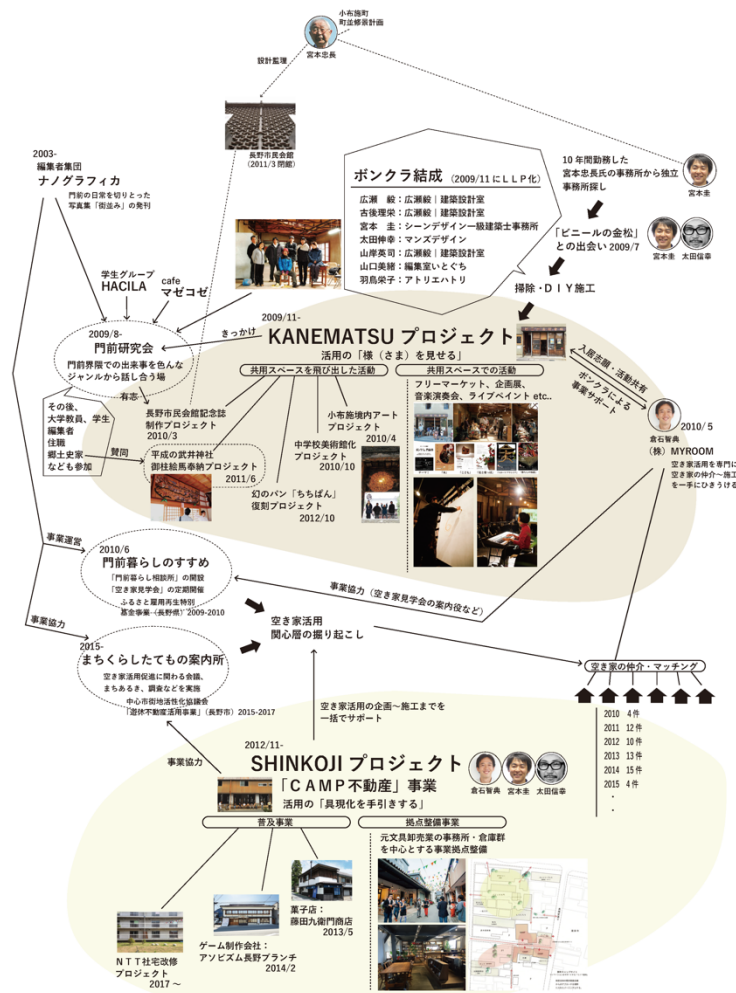
デザイン学部 建築学科 穂苅 耕介

1 研究内容

昨今「リノベーション」という言葉が一般によく知られるようになり、地域社会から放棄されていた建物に独自の価値を見出し再生する空き家再生活動が、全国各地で盛んに行われるようになってきている。一部の地方都市では、ある狭いエリアでリノベーションが同時多発的に展開していく「エリアリノベーション」と呼ばれる現象も起こっている。

こうした動きは、私たちの住まう都市の表情をどのように変えるのか。その実態と可能性を、地域建設業の関わりから明らかにしたいと考えている。

現在は、長野市善光寺門前(図1)や和歌山市ぶらくり丁などを対象に調査を行っている。



KANEMATSU からの拡がり年表

図 1

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・地域建設業を活かしたまちづくり
- ・エリア・リノベーション時代の生活景
- ・人口減少社会のまちづくり/むらづくり

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

- ・地域建設業が参画するまちづくりの社会実験（市川市「行徳小普請組」プロジェクト）**写真1**、**写真2**
- ・リノベーション年表の作成（長野市善光寺「もんぜん年表」プロジェクト）
- ・地域社会と関係する空き家活用モデルの取材/書籍化（取材協力：長野市善光寺「LLPボンクラ」）**写真3**
- ・地域外家族との防災情報共有マップ「野郷の暮らしと防災マップ」の作成（新城市野郷地区防災計画づくりプロジェクト）**写真4**



写真1



写真2

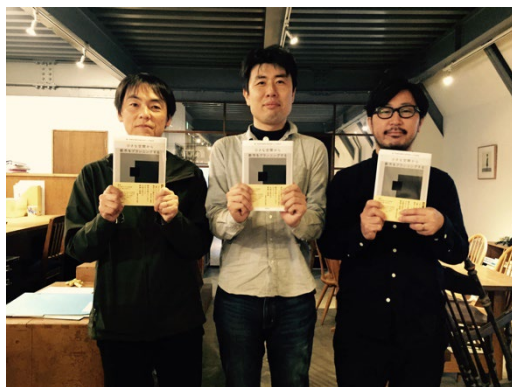


写真3



写真4

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・エリアリノベーション時代の地域建設業の役割と可能性
- ・人口減少社会における生活景の解説

5 連絡先

Kosuke_hokari@dgn.oka-pu.ac.jp

西洋建築史と建築デザインをつなぐ：リノベーションと歴史

デザイン学部 建築学科 岡北 一孝

1 研究内容

建築史、それも西洋建築史と建築設計との結びつきは、なかなかイメージが湧かないかもしれませんが、「建てる」行為の裏側には、歴史、過去が関係しています。何も無いまっさらな敷地に新しく建物を建てるとしても、その傍には自然環境や人工物が必ずあり、人間生活が営まれてきた「場」がすでに形成されているからです。とりわけ、そうした歴史と向き合うことを余儀なくされるのが、リノベーションです。

近年、リノベーションは建築創作の重要な位置を占めています。岡山を見ても、倉敷のアイビススクエアを代表に、近代建築を再生・活用した商業施設が点在しますし、町家や古民家のリノベーションも多く見られるようになりました。文化財に指定されるような歴史的建造物だけでなく、数十年前から百年を超えるあいだ建ち続けてきた平凡な建物が活用される場面は各地で見られます。

このように、手を加えられながら使い続けられる建物が当たり前になると、建築の歴史観も変化します。西洋建築史の一般的な教科書を手にとってみてください。それぞれの作品の着工年や竣工年が記されているはずですが、しかしそれでは建てられたあとの建築の「生」がわからないままです。



図 1 『リノベーションからみる西洋建築史』書影

そのような「線の建築史」の切り口から作品をみてみると、西洋の古い建築は単なる歴史的な知識にとどまらず、われわれがいま建築をリノベーションするときの優れた先行事例となると考えています。

そこで、近年の研究の成果の『リノベーションからみる西洋建築史』では、着工以後、現在に至るまでの改造、改変のすべての蓄積を含めて建築の歴史を考えています。それは「点の建築史」から、「線の建築史」への移行を示しているともいえます。建物を長いスパンでとらえて、その時々介入や改変の創造性に着目したのです。そ

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・日本における西洋建築の調査と評価
- ・地中海文化と瀬戸内文化の比較研究
- ・リノベーション・デザイン

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績



図 2 「ジャーナルプロジェクト」の記事

・2022年9月30日～11月27日まで開催された「岡山芸術交流2022」のパブリックプログラムのジャーナルプロジェクトに、岡北研究室として参加しました。ジャーナルプロジェクトは、学生グループが岡山芸術交流2022をそれぞれの視点で取材し、新聞としてとりまとめたものを表町商店街に展示するプロジェクトです。岡北研究室では、4名の学生がそれぞれの専門分野（建築デザイン、建築史、工業デザイン）から芸術作品をピックアップして紹介しました。新聞記事にも取り上げられるなど、好評を得ました。

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・岡山での芸術祭（岡山芸術交流、瀬戸内国際芸術祭、森の芸術祭 晴れの国・岡山）と連携し、アートと建築を建築史・美術史でつなぐ
- ・岡山における芸術とパトロネージ、コレクションの関係についての研究
- ・ヨーロッパにおけるリノベーションの理論と実践の活用

5 連絡先

岡山県立大学デザイン学部建築学科（〒719-1197 岡山県総社市窪木 111 番地）

Tel: 0866-94-2214 Mail: ikko_ok@dgn.oka-pu.ac.jp

そのほか研究内容の詳細は、<https://researchmap.jp/albertiana/>をご覧ください。

道路交通ノイズマップ推計における計算プログラムの開発

デザイン学部 建築学科 原田 和典

1 研究内容

欧州では、2002年の欧州指令によって、交通騒音や工場騒音の影響評価にあたり、ノイズマップと呼ばれる騒音レベルコンター図を描画すること、またそれらを用いてどのような対策を取るかというアクションプランの策定が義務化された。これにより、騒音影響評価におけるノイズマップ描画は一般的となり、欧州での共通した騒音予測モデル CNOSSOS-EU も開発され、現在は描画したノイズマップをどのように活用していくかが議論されている。

一方、日本におけるノイズマップ活用について見てみると、そもそも描画自体が空港周辺など限定的な範囲でしか行われてこなかった。しかし、ノイズマップを用いることにより、測定ではなし得ない広範囲かつ高精細な騒音レベル分布が推計可能であり、また情報が揃えば過去や将来の騒音レベルの予測も可能である。これらの利点から、今後は日本でも各種騒音に対してノイズマップを描画し、騒音の影響評価をしていくことが求められる。

道路交通ノイズマップの描画にあたり、音源の特性と騒音伝搬のモデル化が必要である。この点において、日本音響学会より予測モデル ASJ RTN Model2018 (以下 ASJ Model) が発表されている。この予測モデルの中で前述の音源特性と

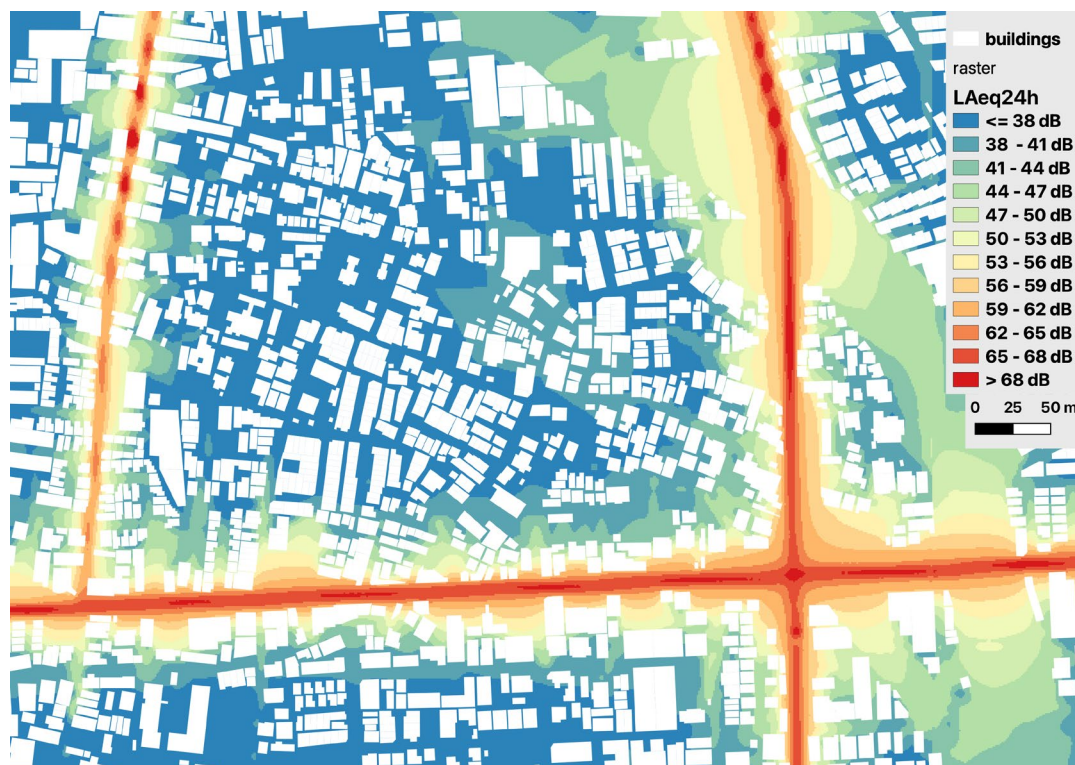


図 描画したノイズマップの一例

伝搬計算のモデルが示されており、精緻な道路交通騒音予測が可能となっている。しかし、ASJ Model はノイズマップ描画を前提とした予測モデルではないため、これを用いたノイズマップ描画にはまだ課題が多く残されている。課題の一例として入力情報の収集・整理や受音点・音源点の配置手順、建物の騒音レベル評価方法などが挙げられる。またそれらに加えて計算精度を保ちつつ、都市レベルの広域なノイズマップを現実的な時間で描画するための計算負荷低減手法の探索も求められる。

現在これらの課題を踏まえて、日本における道路交通ノイズマップ描画のためのシステム開発を進めており、昨年度までに、日本街区に適した建物評価手法の構築、ノイズマップに適した補間手法の検討、分散コンピューティングによる計算負荷低減等を行った。その結果、限定的な条件ではあるが東大阪市全域での描画を達成した。

今後の課題として、伝播性状が異なることから高架道路については未実装であること、対象が道路交通センサスの情報がある道路に限定されること、計算範囲が道路から 200m以内であることなどが挙げられ、現在これらの解決に向けて取り組んでいる。今後はこれらの課題を解決し、更なる計算負荷低減を実現させ、東京、大阪など、東大阪市以外の地域でのノイズマップ描画を予定している。

2 受入可能な研究内容（相談、共同研究、連携可能なテーマ）

- ・ 道路交通ノイズマップを用いた騒音影響の推計
- ・ 保育施設における音環境影響評価
- ・ 会話を伴う音環境における最適な音環境の探索
- ・ その他音環境の調査、改善に関する内容

3 これまでの企業・自治体等との連携・社会貢献活動の主な実績

該当なし

4 今後の研究成果の展開（社会貢献等の可能性）

- ・ 岡山市、総社市における道路交通ノイズマップの描画によって、岡山県内の主要道路の交通騒音影響を明らかにする。
- ・ 描画したノイズマップについて、適した公開手法を明らかにする。これにより、描画したノイズマップを研究者以外でも利用できるようになること、騒音影響についての情報の 2 次的な利用が期待される。

5 連絡先

Email:kazunori_harada@dgn.oka-pu.ac.jp

岡山県立大学 研究・社会貢献シーズ

発行日：令和 5 年 8 月

発 行：岡山県大学

〒719-1197 岡山県総社市窪木 111 番地

TEL 0866-94-2111

URL <http://www.oka-pu.ac.jp/>